

325

506

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

始



36.12.19

21177

325-506

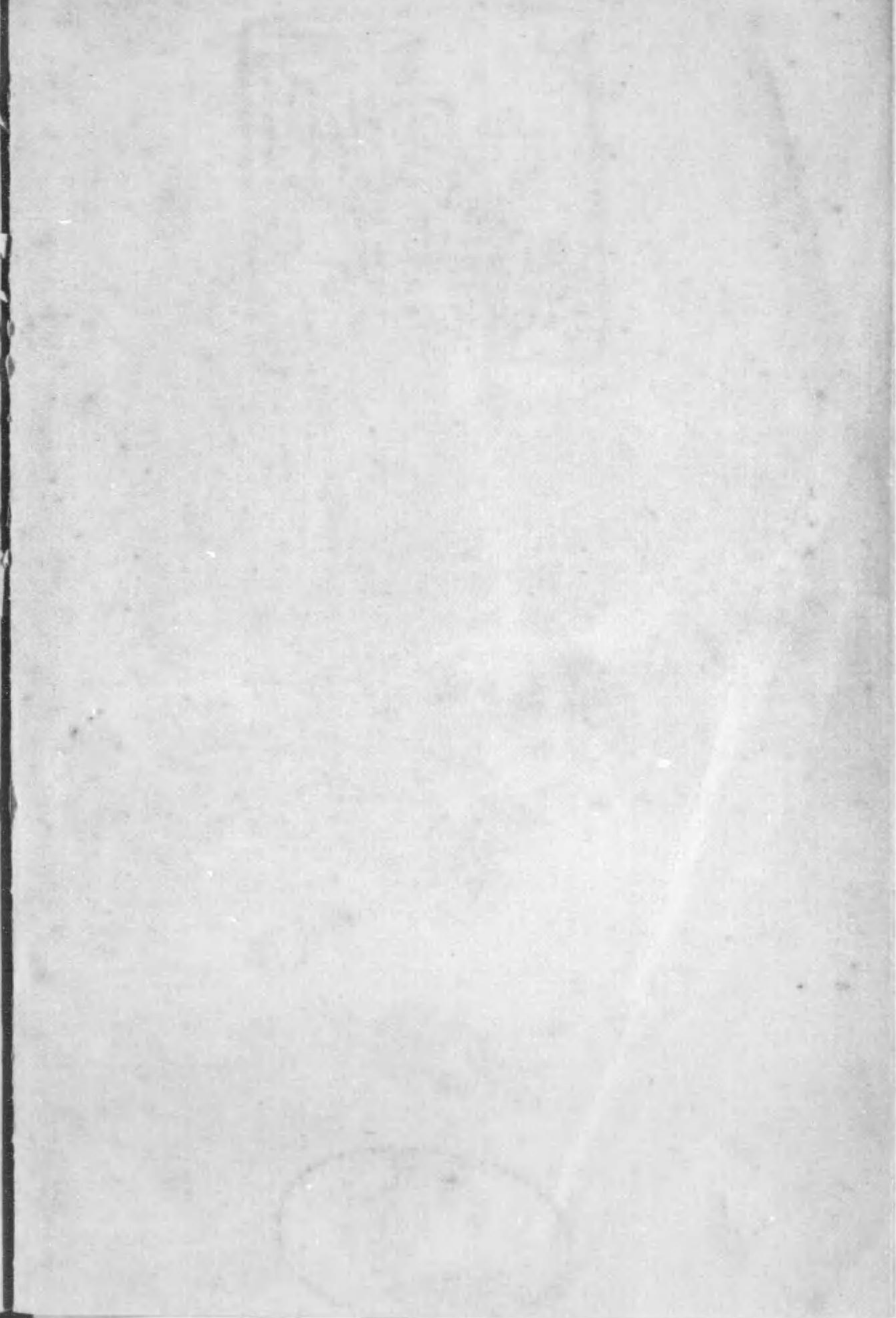


法華經
の
行者

日蓮上人

松川二郎著

大正
6. 6. 14
内交



法華經
の行者

日蓮上人目次

一	小湊の白蓮華(日蓮誕生の奇蹟).....	一
二	得度出家.....	九
三	一場の哀話.....	一三
四	懷疑の雲.....	一八
五	虚空藏堂の一夜.....	二二
六	當時佛教の墮落.....	二三
	遷都と教權恢復——傳教大師と天台宗——眞言宗と新思潮——我朝の暗黒時代——末世末法の大豫言——念佛宗と時代の要求——日蓮と宗教改革	
七	發心遊學.....	三四
目次		一

日蓮上人 二

八 山を降て鎌倉へ……………三六
孤影悄然山を下る——歸省兩親に見ゆ——念佛の頑迷に驚く

九 念佛宗の研究……………四一
念仏つしう けんきう

一〇 叡山時代……………四四
えいざんじだい

一一 八宗兼學……………四九
しゅうけんがく
轉然として心境開く——復び郷里に歸らんとす——高野山に遊ぶ——そ
の奇遇に驚く——儒教國學を學ぶ

一二 日蓮の大抱負……………五八
にちれん だいたうふ

一三 日蓮天命を知る……………六二
にちれん てんめい
日蓮と古來の豫言——復び故里に歸る——伊勢大廟に祈る

一四 故山の日蓮……………六九
こざん にちれん

一五 日蓮の開宗……………七四
にちれん かいしゅう
旭の森の大祈願——清澄山頭の宣言

一六 會衆の激怒……………八〇
くわいしゅう げきど

一七 危機屢到……………八二
きき しほくいた

一八 日蓮の改名……………八六
にちれん かいめい
日蓮の感慨如何——齋藤一家の改宗——兩親も亦歸依す——いよく鎌倉
に出づ——鎌倉當時の形勢

一九 日昭歸伏す……………九六
にっせうきふくす

二〇 法敵征討の門出……………九九
はふてきせいたう かんで

二一 街頭の説法……………一〇二
がいてう せつぽふ
行者の意氣軒昂——四條頼基歸依す

日蓮上人	四
三 歸依者愈多し	一〇
進士太郎善春歸伏——日期の入門——船中の法話	
二 日蓮の孝養(父妙日の死)	一七
二四 天變地異	二〇
二五 窟裡の大著述	二三
二六 焼討と布教	三〇
草堂の焼討——下總若宮の布教——歸府と神道研鑽	
二七 伊豆流罪	三六
漁夫日蓮を庇ふ——伊東領主の歸伏——醜所の日蓮上人	
二八 信念益々固し	四七
二九 死せる母を蘇生らす	四八

三〇 兩總巡錫	五四
三一 母妙蓮遂に逝く	五五
三二 蒙古の牒狀來る	五六
三三 諸宗の讒訴	六一
三四 日蓮の法力	六三
或は疫癘を攘ひ——或は雨を降らす	
三五 問注所の糾問	六七
三六 満座色を失す	七〇
三七 龍口の法難	七二
從容として難に赴く——泣く者、笑ふ者——八幡大菩薩に物申す——別れを金吾に告ぐ——特信の萩の餅	

三八 怪光一閃……………二七九

懐愴たる刑場の光景——怪風怪光日蓮を救ふ

三九 明星降下……………二八四

四〇 佐渡流罪……………二八五

四一 塚原の苦難……………二八八

四二 陰謀と宗論……………二九〇

四三 日興訪ね来る……………二九一

四四 上行の身證……………二九三

四五 謫居の移遷……………二九六

四六 本尊の建立……………二九八

四七 赦免……………三〇〇

四八 歸府……………三〇三

四九 國諫三たび……………三〇四

元兵來寇の機を問ふ——雨乞と大風の豫言

五〇 妙宗の公許……………三〇七

五一 鎌倉の寺院……………三〇九

五二 甲州の隱栖……………三一一

五三 甲州の巡錫……………三一一

五四 望郷の哀愁……………三二三

五五 元兵の來寇……………三二四

五六 恩師の計……………三二六

五七 所勞と疑獄……………三二六

日蓮上人	八
五八 日蓮の諭告	二二〇
五九 蒙古復び來寇	二二一
六〇 聖者の大抱負	二二三
六一 後事を附屬す	二二六
六二 遺物の分配	二二九
六三 大聖入寂	二三一
六四 立正安國論大要	二三四
六五 日蓮と婦人	二四七
<small> 日蓮と婦人……… 女人と成佛——信仰と夫婦關係——婦人より得たる慰藉 </small>	

目次終

法華經の行者 日蓮上人

松川二郎著



一 小湊の白蓮華(日蓮誕生の奇蹟)

東天紅を潮して、長閑に明けわたつた朝風の春の海。時を離るゝむら鳥の聲、曙の空を渡るど見れば、山には紫雲たなびきて、渚には大輪の蓮華咲きみだれ、折しもさし昇る朝日の光に、微妙の薫を漂はせながら、見渡すかぎり涯しもなく、一面に輝いて居た。

時は貞應元年壬午春尙ほ寒き二月の中洗、所は都を去る百五十里の東海の濱。

小湊の白蓮華

ここ安房の國小湊の磯邊では、幾多の老若男女うち群れて、世に又となき海上の異觀に驚きの眼を瞠つた。

『さて、不思議なことがあればあるもの。夏咲く花が春開き、池には咲か
で海に咲く。こは必定何かの奇瑞であらう。今に此村には、目出度いことが
あるに相違ない。あゝら嬉しや』

浦人共が口々に此廢事を稱へながら、喜び合つてる折柄、「師匠殿のお宅では、
赤ん坊が生れなかつた。」と云ふ噂が、それから其れへと傳つたので、平生から
心安き人々は、「さらば慶びに參らむ」とて、皆なく打ちつれて師匠殿の家へ
と向かつた。

靜なること太古の如き小湊の里で、師匠殿と呼べるゝは、其名を貫名次郎重

忠として、大職冠鎌足公十二代の孫、少納言藤原の共資の後裔に當る人である。
共資はやがて遠江守に任せられ、其國の村櫛村に移つたが、故あつて姓を井伊
に改め、其七代の孫四郎政直別家して、其國の貫名郷を領するに及び、地名に
因むで、姓を貫名と改めた。重忠は其玄孫に當るのである。人と爲り温厚篤實
にして、剩さへ文武兩道を兼ねて居たが、頼朝府を相州鎌倉に開いてから、北
條時政の讒によつて、建仁三年五月七日、遂に安房の國に流されたのであつた。
重忠は配所の月に、昔を偲ぶ落魄の人となつたが、今は運を天に任かして、
長狹の郡、寄浦なる瀧口兵庫を頼り、ここに身を卑して、自から漁夫の群に入
つた。聽て彼は下總の國道野邊の豪族、大野吉清が娘梅菊を迎へて妻となし、
或は綸を垂れて魚を釣り、或は村の兒童に讀み書きの道を教へて、纔かに其日
を送つて居た所から、さては「師匠殿」と敬はるゝに至つたのであらう。

妻梅菊は夫を助けて晝は終日、貝を拾つて之を市に鬻ぎ、夜は夜もすがら、芋を績むで、佗しき月日を送つて居る中にも、常に日輪を信仰し、朝は疾く起きて身を淨め、磯邊に立ちて、さし昇る朝日の影に家運の挽回、子孫の繁昌を祈らぬ日とはなかつた。

夫婦の間には既に二人の子があつた。が、行末武士に育て上げむばかりに、何れも舅の許に預け居たから、今更ら引き戻す譯にも行かず、寂しまゝに、今一人の子寶をとて、夢にまで之を見る程であつた。

それは卯の花下しの晴間なき承久三年夏の初、梅菊は例のやうに、磯邊に立ちて、日の出を仰いで居ると、光明赫々たるかの日天子が、八朶の金蓮華に乗つて、眞一文字に海を渡り、いきなり其懐に入るよと見て目覺むれば、それは今しばしと眠む曉の夢であつた。

不思議な夢に奇異の思をなしてゐる間に、彼は早くも尋常ならぬ身となつたので、さてこそ日輪の申し子と、夫婦は互に歡びながら、只管月の滿つるのを待つて居る間に、何時しか青葉の夏も過ぎ、紅葉の秋も逝いて、其年も暮れ、明れば貞應元年改暦の慶び申納むる程に、早や梅花綻ぶ二月十六日となつた。

この日小湊の磯邊には、渚一面、白蓮華の咲いた奇瑞を訝かる中に、又復重忠が宅では、鍬一つ入れもせぬのに、籬の畔から、美しい泉が滾々として湧き出でた。

『時ならぬ時蓮華が咲き、鍬一つ入れぬのに泉が湧く。彼方も不思議。此方も不思議。』

『吉か凶か、いざ師匠殿に考へて頂きませう。』

浦人達が顔見合せて、訝かる折しも、馥郁たる芳を吐いて、咲き誇つた梅の小

枝に、初鶯の胸毛を震はせながら、玉音朗かに一聲高く、ホ、法華經と鳴いた。途端に貫名の妻梅菊は、安々と玉の如き一男子を擧げた。重忠はいと喜ばしげに一室を出で、

「さて、不思議な瑞相ではある」

と、人々の祝言を感謝しながら、直にその泉を汲むで、産湯に充てた。嬰兒は眉目秀麗、自から氣品と威嚴とを備へて居るので、此兒こそ、やがて父祖の名をあげるであらうと、口々に讃へ合つた。

話變つて、松青く砂白き小湊の浦近き天津の村に、千光山清澄寺といふ眞言の古刹があつた。鶴蒼たる縁樹幽邃の趣を添へて、溪泉苔深き所、法理の妙を藏するかと思はれたが、當時の住職は、道善法印と云ふ人で、夙くから

博學多識の聞ある人であつた。重忠は折々法印の法話を聞くのを、何よりの楽しみとして居たが、此の瑞相ありし日の翌日、法印は妙ヶ浦の磯邊に白蓮華の咲き出たと云ふ噂を確かめ、かつは久しく訪づれなかつた重忠の近状をも問はむとて、朝より其山を下つた。

然るに何等の奇蹟であらう？ 蓮華座に在はします釋尊、青蓮の眸をあげて、「汝明日本化の大菩薩を拜するであらうぞ」とお告げになつた不可思議の靈夢を見た翌日。妙ヶ浦に至れば、噂の如く、渚一面白蓮華咲き亂れ、序でに立ち寄つた貫名家には、一人の男の子が生れて居つた。

道善は嬰兒の顔を一目見るや、靈夢に現はれ賜ひし御佛の姿に、微塵違はぬ面ざしなので、さても不思議！。釋尊の入滅は二月十五日と申すに、此子は十六日の誕生。さて、未頼しい和子どのだと讃へて、他事ならず且つ驚き且つ

喜むたのである。

重忠夫婦は、日天子の奇瑞に因んで、名も善日磨と名づけ、天を拜し、地を拜し、只管に神明の加護を祈りながら、いつくしみ育てける程に、其の健かな肉體、勝れた頭腦、聰明な資質は、一舉手一投足の上にも現れて、四五歳の頃から、一度読み書きの道を教ゆれば、直に之れを暗じ、一を聞いては十を悟り、群童の中に交つても、殺生を好まず、魚鳥を喰はらず、只管書に親んで、佛を祭るを樂しみとなし、その振舞ながら大人のやうであつた。

附言 人或は日蓮の血統を探ねて、海人の子なりと云ひ、或は、旃陀羅(屠兒)の家より出づなど云ふ者あれども、如此きは毫も上人の價値を上下するに足らぬ。否寧ろ旃陀羅が家より出で、日本の思想界に一大光明を與へ、

以て法の闇に迷つて居た人人を救つたと云は、それこそ却つて上人の徳を大ならしむる所以であるまい乎。但しここには、傳説に従つて、一應遠州井伊家の出だとして置いた。

二 得度出家

この小湊といふのは、蒼波漂渺たる太平洋の表に面した安房の一漁村であるが、其濱邊は松青く砂白うして、絶えず自然の妙音を奏で、後の山には、常に千古の緑をたゝえた大森林が差し懸つて居る。善日磨はここ東海の濱に立つて、朝毎に、森々たる波の上からさし昇る朝暉の壯嚴美を拜し、踵を回しては、幽玄なる寂の森に佇み、常に言ひ知れぬ一種の靈感にうたれて居た。されば此光景は、餘程深い印象を其胸に刻むたと見え、叡山にあつても、佐渡にあつても、

將た身延にあつても、終始之を想ひ起して、轉た追懷の情に勝えられなかつたやうである。然矣この雄大なる環境の自然は、我法界の雛鳳——麒麟兒の性格上に、餘程深刻なる感化と印象とを與へたにちがひない。

聽て十歳にもなれば、父に代つて、里の兒童等に教へたのであるが、その孝經論語を講じて、懸河の辯をふるへる時の如きは、聽く者何れも舌を捲かざるはなく、後には教を受けむが爲に、幾里の山路を辿つて、態々この里まで來た篤志家もあつた位だ。されば道善法印はこの子の噂を聞く毎に、何如にもして之を我手に入れ成長の後には、天晴れ一世の名僧智識たらしめむとし、其旨人を介して申し入れたが、重忠は「今こそかゝる片田舎に餘生を送れども、我家は本來大職冠鎌足公の裔である。されば、よし我は此地に朽ち果つることもこ

の兒ばかりは是非とも我手に育て上げ、一は此父の冤を雪ぎ、また一には此子によつて、復び我家名を興したい。外のことなら兎に角、このことばかりは」と、一も二もなく其交渉を拒絶した。が、善日麿は豫ねて出家の願ひがあつたので、この機逸すべからずと爲し、

『出家はとまれ、學問のお弟子となるのに、何の仔細がござらうぞ。この儀何卒お許し被下』

と、切りに頼むので、重忠も否みかねて之を許し、名も之を樂王麿と改めた。時は天福元年五月十二日、丁度かれが十二歳の時であつた。

爾來道善は、之に和漢の學を授け、さらに又眞言の教義を教へたが、如何なる難解の經文も、唯一誦して之を暗じ、其義を問ふも、敢て滯滞する所がないので、之こそ我法界の麒麟兒と、心を碎いて教育すれば、彼も亦師の恩に感じ

て、日夜精勵、孜孜として力めて倦まなかつたので、其才學は乍ちにして學僧を壓するに至つた。

仍で道善は復び重忠夫妻を訪ねて、この子の出家を申入るれば、二人も今はしどやかに、

『一人出家して、九族天に生れなば、一家この片田舎に埋れたりとて、何の恨がござりませう。疾く／＼出家させて被下』

と言ふより、道善いたく喜び、早速この旨を藥王麿にも語り、慈覺大師の古道場で、三七日の練行を勤め了ると、やがて本堂に於て嚴かな剃度の式を行ひ、さらに其名を是牛房蓮長と改めた。これ實に我佛天の雛鳳が、大飛躍の第一搏で、時は嘉禎三年十月八日年十六のことであつた。

三 一場の哀話

英才を總角の間に認めて、早くも其將來を想見したのは、當時房州の地頭東條左衛門景信その人であつた。景信には、今年七つになる唯つた一人の美しい娘があつた。仍で善日麿をもらひ受けて、姫が行末の婿がねにせむとは、そが平生の希望であつたが、道善法印も亦、切りに之を望むで居るを聞いて、遽かに村長七兵衛を遣はし、其旨を申し入れたが、重忠は折角の思召ではあるが、昔は昔、今は今、賤しき漁夫の子と生れた善日麿が、何うしてお歴々の姫君と許婚が出来ませうぞと、即坐に之を辭退した。仍で七兵衛は、

『はてさて、寝た牛が一生涯で過すではなし、東條家は鎌倉殿の御覺え目出度く、何でも願へば叶ふとやら、左様に要らざるお辭儀をなさらずとも、こ

の許婚が出来さへしたら、貴下一家も再び世に出で、復た幸福の身になるであらうに」

と、心をこめて説き伏せやうとしても、夫婦は頑として應じなかつたので、七兵衛は、ぶり／＼怒つて、其門を立ち出でた。

そは或夏の夕であつた、善日鷹が、門に干した乾海苔を取り入れやうとする折柄、四五人の里の子が、鳥の雛を虐げつゝあるのを見て、直に之を押止め、唯その雛を助けたいばかりに、慈鳥孝鳥の物語をしてやつた。子供等は分からねながら、拒む譯にも行かず、その儘其處に打捨て、各々が家へと立ち歸つた。後で鷹は徐ろに其雛を拾ひ上げ、懇ろに介抱して懐に入れ、残りの仕事に取りかゝつた折しも、先程から松の木陰にあつて、善日鷹の振舞を窺つて居た

東條左衛門は、如何にも驚歎したものゝ如く、應て善日鷹に聲をかけ、其子の年や名前などを尋ねた後、

「さて今彼處で聞いて居れば、雛鳥を助ける爲に、慈鳥孝鳥の物語、如何にも其方は、物識ちやが、さて鳥を吉鳥と申す次第を存じ居るか」

と問はるゝまゝ、彼は言葉も爽かに、

「虞舜至孝にして、鳥其庭に巢くひ、曹參瓜を鋤けば、鳥その冠に萃る。李陶母の墳を營めば、鳥塊を運び、叔和母の墓を築けば、赤鳥巢をかけたとか申すことを、豫ねて父より聴かされて居ります」

と應へて家に入つた。

この時松の蔭から現はれた村長の七兵衛は、東條氏の前に跪きて、「何と御覽遊ばした」と問かくれば、景信は、

『六十餘州を探したとて、これ程の婿がねが何處にあらう』
とて尙ほ吳々許婚のことを托して、名残惜しげに其處を立ち去つた。
かくて七兵衛は、殆ど連日に亘つて、重忠夫婦を説き伏せやうとした甲斐も
なかつたので、東條氏が自から道善法印を訪ねて、善日磨が出家の志を繰へ
させやうとしたが、之も遂に如何ともすることは出来なかつた。

善日磨が清澄寺に上つてから、三年の春秋は夢のやうに過ぎ去つた。經典は
既に讀破して、博學多識の聞えは、響の如く四方に傳り行いた。かくて佛家の
鸞鳳、僧界の龍虎たるべき善日磨は、ここにいよいよ黒髪を剃り落して道心堅
固に其身を持することとなつた。

このこと早くも景信の知る所となつて、ここに端なくも波瀾曲折の哀史をつ

とるに至つた。さて景信の女浪路は、まだ見ぬ戀に懐かれて、其後幾年を美は
しい夢の中に生ひ立つたのであるが、善日磨いよ／＼得度の報を聞いては、小
さき胸も千々にくだけて、はては自からの薄倖なる運命を泣かすには居られな
かつた。

姫は竟に、失はれたる我戀を求めむとて家出した。一首の歌を書き残して、
行衛定めぬ放浪の旅路に上つたといふ。

見るや如何に仇にも咲ける朝顔の、花にさきだつ今朝の白露
あゝ何といふ哀れな處女の情調であらう？。一首の歌に、悲痛なる其運命を暗
示して、行衛も知れずなり果てた浪路の上を思ふ時、我は言ひ知れぬ心の痛を
感せずには居られない。

四 懷疑の雲

既に俗塵をのがれて、墨染の衣に其心を包み、名を蓮長と改めた後は、寢食を忘れて法理を經典に究め、三部諸論は勿論、求問持等の印契をも傳承して眞言の奥義を稽へ、或は短檠の下に瞑目して、法理の妙を想ひ、他人十年の業は、已れ三年にて之を成さむと、只管思を練る中、乍ち一つの疑は、むらくとし其胸底に起つた。

『そも〜釋尊の宗旨は、何れにて在します？』

蓮長は手を拱ぎ、目を瞑つて、自から問ひ自から釋むとし、

『そも〜佛法は、釋尊の説かせ給ふた一代の御教。一天四海の中、唯一無二の法でなければならぬ筈。然るに教中宗を分ち、宗門更に派を立て、彼

を誹り此を罵り、之を推し彼を貶し、教多岐に分かれて、何等の統一なきは、果して世尊の主旨に適ふであらう乎。

此の如く教統一を得ざれば、衆生その歸依する所に迷ふ道理なるに、今我佛門の宗派を觀れば、南都には俱舍宗を始め、成實宗、三論宗、法相宗、華嚴宗、はた律宗を數へ、平安朝には、傳教大師の天台宗を始めに、眞言宗があり、更に當代には、念佛宗、禪宗等のあるありて、既に八宗の多きに及び、八宗又數十派を數ふるに至つて居るが、これ畢竟するに、その憑る所を異にするからであらう。我れ佛門に入るからは、須らく先づ各宗の正邪を糺し、釋尊の主旨を得たる主旨を究め、眞の光明をもて、濁世の闇を照さねばならぬ。』

と、心私かに決する所あり、一入心を潜めて沈思默想したが、疑心の雲益深

うして、容易に決せられさうにも無い。仍で今は我方に及び難し、いざ師の教を請はむとて、或日師の坊に向ひ、

「蓮長に一つの疑ひあれど、凡慮の身の自から解く由もござりませぬ。願くば蓮長が蒙を啓かせ給はむことを。そも〱涅槃經四依の法には一法に依りて人に依らざれ、義に依りて語に依らざれ、智に依りて識に依らざれ、了義經によりて不了義經に依らざれ」と説き給へるに、華嚴、天台、法華、念佛、眞言、何れも立宗の基同じからず、さても了義經として、釋迦世尊の正意に適ふものは、何れでござりませう。」

と、徐ろに質義を試みたが、師の坊は手を拱ぬぎ、首を垂れて、何れとも答へず、唯々黙するのみであつた。

五 虚空藏堂の一夜

蓮長の疑ひは、愈深くなつて行いた。かくて彼は、一室に閉ぢこもりながら、専心未見の經文を繙いたが、今は既に我が蒙を啓き、我が惑を釋くべき師もなく友もなく、唯々頼み奉るは、當山の本尊處虚空菩薩が在しますばかりである。そこで蓮長は覺悟をきわめ、三七日が間斷食して、いよ〱此に祈願をこめることとなつた。

千古の老松古杉鬱蒼たる清澄の峰。山頂晝尙ほ暗き森蔭に、一つの虚空藏堂がある。菩薩の像は、當山の開基不思議律師の刻せる所だといふ、蓮長はここに三七日の間、夜な夜な參籠し、只管心をこめて大祈願を凝した。

いよ〱滿願の夜となつた。この夕も龕前にぬかづいて、或は經文を誦し、

或は何事をか唱へ、一心不亂に大祈願を捧げて居たが、漸くにして首を擡げた蓮長の顔は、何事ぞ！驚きと喜びと涙とに充たされて居た。かくて蓮長は、慄へる足を踏みしめ、やつと立ち上りて、御堂の扉を開かむとしたが、如何なる機にか、サツト血を吐いて、四邊の秋草は紅の血潮に染められた。

蓮長は宛然酔へるものゝ如く、心魂恍惚として、階前に倒れて居たのであるが、不圖我に返へれば、夜は次第に明け離れて、折柄曉を報する鐘の音が、聞くともなく其耳に入つた。さうかうする中に、寺坊の人が「三人禮拜に来て、この光景に驚き、相扶けて之を本坊に連れ戻つた。」

これ實に蓮長が十六才の時のことであつたが、三十三年の後、蓮長（後の日蓮）は其夜のことを追懐して、左の如き一書を當時の舊友に書き送つた。

「幼少の時より、虚空藏菩薩に願を立て、云く「日本國第一の智者となし給

へ」云々、虚空藏菩薩眼前に高僧とならせ給ひて、明星の如くなる智慧の寶珠を授け給ひき、その験にや、日本國の八宗、並に禪宗、念佛宗などの大綱も、略ぼ伺ひ侍りぬ」云々。
知らず日蓮は、何故にかくまで深く祈願をこむるに至つたか、之については、少しく當時の佛教界を語らねばならぬ。

六 當時佛教の墮落

遷都と教權恢復

釋尊の教我國に傳つてより越に七百年。その齎せる學藝と技術とは、我上古の文運を助長して、奈良朝の盛時を現出し、七大寺の殿堂伽藍は、依然朝暉夕

陽に輝いて居たが、道鏡の失敗によりて、寺院の權威と僧侶の勢力とは、一朝にして全く地に委れた。勢を見るに敏なりし延暦の帝は、この機に於て、政權を僧侶の教權より恢復せむとし、延暦三年竟に意を決して、遷都の詔を發せられた、勿論その動機は、決して之のみに限られなかつたであらうが、政教分離、王權恢復といふ一事が、その主なる一大原因であつたことは、當時の山法師が、この詔に憤慨し、動もすれば兵力に訴へても、之を沮止せむとしたことによりて、略ぼ之を察することが出来る。

傳教大師と天台宗

七大寺の僧侶が、旦暮唯、勢力の挽回のみに腐心して居た延暦四年の夏七月、今まで大安寺の一室に、只管讀教のみに耽つて居た當年十八才の一沙門は、何

を感じたか、突然その姿を晦まして、比叡の絶頂にかけ上り、ここに一小庵を結むで、寂然端坐、おほけなくも天台開宗の大祈念を凝し始めた。この沙門は、後に傳教大師の諡を賜はつた最澄と云ふ一聖僧であつたが、其胸底には、救世濟民の大慈悲心と、機を見るに敏なる大策士の智慧とが相潜むで居た。

眞言宗と新思潮

傳教大師の學識と信仰とは、乍ちにして一世の隨喜渴仰を受けたが、兎角する中に、桓武帝は崩せられ、唯さへ心を傷めて居つた折柄、さらに驚くべき一大勁敵が現はれた。こは後に、弘法大師と云つた空海上人その人である。弘法と傳教とは、年を同じうして、入唐した。傳教が僅かに、九個月はか留學しなかつたのに反して、弘法は數年を長安に送つて、當時漸く勃興し來れる

眞言密教なるものを收めて来た。時恰も平城帝崩御ましまして、才氣煥發、好學博識、而かも年少氣鋭にして、意氣軒昂たる嵯峨帝の御代となつたので、弘法の教は、忽にして、新時代の新思潮となり、朝野の貴縉大家は争ふて其門に走つた。

傳教の法弟慈覺、智證等が後年入唐して、専ら眞言宗を學んで来たのは、天台の教が、弘法の爲に壓せられて、其教權日に日に廢れ行くのを恢復せむが爲であつた。が、慈覺、智證などの小智見、いかでか其右に出づるを得む。叡山は乍ちにして眞言宗の出張所となり、傳教が南都六宗と戰ふて、漸くうち立てた佛教統一の雄圖は、脆くも摧けて、法華三昧の常行堂には、念佛唱名の修行盛に行はれ、その生けるや、眞言密教の行者であつたが、死に瀕するや、乍ち阿彌陀佛を唱へて、心私かに往生安樂を冀ふ者、豈唯宇多上皇のみなら

む、叡山三千の僧侶は固より、上下幾百萬の信徒悉く皆然りであつた。

されば命が惜くなつた者は、周章て普賢を祭り、敵を有する者は、呪ふて之を殺さむとし、そして戀するにも、菩薩に願かけて其人を靡びかせむとし、現世の榮華と來世の歡樂を得むが爲には、荐りに天台眞言の僧侶を歓迎し、僧侶亦自家の權勢を張らむが爲に、喜むて其意を迎へ、互に相利用して、寺院は、何時となく宮廷の一部たる觀を呈し、甚しきに至つては、市井無頼の徒を狩り集めて、山法師なる兵團を組織し、之によつて其反對黨を威嚇し、また之によつて、その求むる所の利權を獲得せむとした。

我朝の暗黒時代

如此く寺院は専ら宮廷に取入つて、唯それ私利私慾を營むことにのみ腐心し

て居た間に、地方の行政と兵權とは、何時の間にか源平二氏に壟斷せられ、竟に保元平治の大亂を醸すに至つた。この大亂は、利害の爲には人道を無視し、五常の道すら蹂躪して憚からざりし當時の人心を、遺憾なく暴露したので、恐らく我三千年の歴史に於て、この時ほど人心の腐敗して居た時代はあるまい。

遮莫保元平治の亂に、天下の權勢を獨占した平家の一門も、藤氏の輩に倣ふては、檀の浦の一戦に、果敢なくも榮華三十年の夢を破られ、之を破つた源家三代の覇業も亦、何時しか北條氏の爲に盜まれ、播磨ここに幾年道心益微かにして、人はこれ匪徒か、竟に開關以來の大變亂——臣にして君を流し奉るといふ大逆無道の行を、敢てして憚からざる、我歴史上の暗黒時代を現出するに至つた。

末世末法の大豫言

この時代に處して、佛教は何をして居たか。よしや政權は武門の手に移つて、京都の朝廷は、唯纔かに虚器を擁して居られたに過ぎなかつたとは云へ、弘法以來既に四百年、山を開き、橋を架し、播種を教へ、寺を建て、終始地方の人民を教化し來つた眞言宗の勢力は、半平として容易に抜くべからざるものがあつた。が、其教は依然大元帥法とか、十五檀法とか、嚴めしき大修法にあらすむば、護符とか、呪札とか、下級の愚夫愚婦をして、益迷心の道を辿らしむべき祈禱修法のみで、眞摯なる思想家や、又は教義に疑ひを懐ける沙門の人々に對しては、毫も之に安心立命の光を與へなかつた。而已ならず、

正像稍過ぎ己つて、末法太だ近に在り、法華一乘の機、今正しく是れ其の時

なり。

といふ傳教大師の豫言は、之を學徳よりも修法、信心よりも塔堂繪畫建築などに重きを置いた王朝以來の實跡に徴し、ことに保元平治以來、寺院殿堂の焼失相踵いで起り、聖武天皇が王法佛法の固めとして建立せられた東大寺の大伽藍も、平氏の一炬乍ち焦土に歸し、その大佛像は、田舎武士の兇刃にかゝりて、果敢なくも其首を失ひ、この無禮を敢てした平家の一門も、終には西海に亡び、生き残つた建禮門院は、「一生の中、天界から地獄に墮ちて、六道輪廻の現證をへ、唯彌陀得生極樂を唱して、餘生を送くられた」と云ふ如き、哀れ深く悲み多き幾多の事實を見ては、人唯か「末法正しく到る」の感にうたれざる者があるらう。誰か豫言の實現に其心を動かされざるものがあらう。念佛宗の勃興決して偶然ではない。

念佛宗と時代の要求

この時代思潮に觸れて、勢ひを得て來たのは、阿彌陀如來の信仰と、西方極樂の欣求とであつた。されば空也は踊り念佛を始めて、其哀音を民間に傳へ、大原の良忍は、融通念佛といふものを唱道して、上下の渴仰を受けたが、この時代に於ける代表的救世主とも云ふべき者は、かの法然房源空上人その人であつた。上人曰く、

『唐我朝のよろゝの智者達の沙汰し申さるる觀念の念にもあらず、又學問をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず。唯往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申せば、疑なく往生するぞと思ひ取つて申す外には、別の仔細候はず。但し三心四修なんぞ申す事の候は、皆決定して、南無阿彌陀佛にて往生

するぞと思ふ中にこもりて候也。この外に奥深き事を存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信せん人は、縦令一代の法をよくよく學すとも、一文不通の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じて、智者の振舞をせずして、只一念に念佛すべし。』

法然の大信心は、この一節の中に溢れて居る。されば、久しく人生の間に迷ふて、荆棘の中に疲れた身を横へて居た苦悶の衆生は、この福音を聞いて、宛然隊商が泉の森を望むで走れるが如く、何れも歡喜の聲をあげて、吉水の草庵に推し寄せ、南無阿彌陀佛の唱名は、乍ちにして天地を震撼し、上は上皇、尼將軍より、下は僻陬の草刈る賤の女に至るまで、争ふて此の名號を唱ふるに至つた。

日蓮と宗教改革

如此くにして宗教改革の必要は、意識無意識の間に、一生の大渴望大要求となり、念佛宗は起る。禪宗は來る。而して法然・親鸞・道元等の聖僧偉人は、踵を接して教界に現はれたのが、要するに此等の勃興は、何れも煩瑣なる學智修法の荆棘を芟いて、直裁の一路に歸し、以て天真獨露の一心を求め、あはせて一意本來の面目に徹透せむとするに在つた。

日蓮が生れたのは、承久の亂後一年。法然が世を去つてから十年。その法弟聖光・隆寛等が、四方に分かれて其教を宣傳し、北條氏の一門中にも、之に歸依する者決して尠くなかつた。が、時頼の如きは、之を斥けて道隆に參禪し、部下の武士亦之に倣つたが爲に、禪の教も日を追ふて擴まり、竟に建長寺の建立となり、其勢甚だ侮る可からざるものがあつた。これ日蓮が、後年警告を

北條氏に與ふるに方り、最も力をこの禪と念佛との排撃に盡した所以で、その憎まれたのも、亦、多くは此に在つたのである。

蓮長既に如此き時代に生れ、面り如此き末法の現證を見て、その何れが佛の御心なるかを知るに苦しみ、煩悶懊惱分く所を知らず、竟に虚空藏堂の一夜血を吐いて、『日本第一の智者となし給へ』と祈つたのも、決して偶然のことではない。

七 發心遊學

蓮長は勤行を出づると、又もや大藏に入つて、一切經の奥義を究はめむとした。或日無量壽經を読み行く間に、釋迦世尊が、大莊嚴菩薩に告ぐる文中、

『佛眼を以て之を見るに、衆生の性慾種々なれば、強いて正法を説くと雖、或は耳に入り、或は耳に入らず。入らざれば則ち是れ空文なり。故に其時に應じて種々にして、法を説くに皆方便力を以てす。此間四十餘年。未だ眞實を顯はさず』

の一章に至つた時、蓮長は釋然として悟れるものの如く、忽ちハタと膝を拍つて、

『此處なる哉。此處なるかな』

と絶叫し、大聖釋迦世尊は、十九歳にして出家し給ひ、三十才にして成道せられ、檀特山を下り、三七日の間寂滅道場に於て、法を説かれたのが、華嚴教である。其後阿含十二年、方等十六年、盤若十四年、更に七十二歳にして、法座を鷲の靈山に移し、約八年の間、法華本迹二門、並に如來出世の本懷を説い

たのが、即ち法華經である。

かくて世尊は、七十九歳にして不滅の滅に入らせ給ふたのであつて、此四十年の間、未だ眞實を顯はさずと宣ふからは、凡て正法にあらざる方便であつて、釋尊正意の眞法は、所詮靈山以後に求めねばならぬ。此以前の諸經には、假もあり、眞もあり、權もあり、實もあり。盡く釋尊の正意に出でたのである。故に我は法に依つて、釋尊正意の在る所を究め、以て宗派多岐なる佛法の統一を圖るであらうと。ここに愈決心の臍を固め、之より天下に遊學して、諸宗の研究、權實の識別に其身を委ねむとするに至つた。

八山を降て鎌倉へ

孤影惘然山を下る

一たび決した志は鐵よりも堅かつた。

蓮長は清澄山を去るに臨むで、過去八年の間、深く我を愛しみ給ふた師の恩の大なるを思ふて、竊かに遁れ去ること罪深きを思ふたが、縱令このことを告ぐるとも、所詮許し給はざるは、火を賭るより明である。而かも此行や、私の爲にあらずして、寧ろ法の爲に一身を捧げむとするもの。故に業成り志遂げた後、また謝すべき道もあらうと、ここに愈その志を決した。

さはれ、まづ其の何れに行くべき乎に就ては、些か迷はざるを得なかつた。南都に行かば、古宗の七大寺がある。叡山や三井寺には、天台の戒壇があり、又高野には、眞言宗の本山もある。故に遍ねく天下を周遊して、諸宗の奥義を究めることも、固より大切なことではあるが、鎌倉は今幕府の所在地で、佛教の盛なること、決して奈良京都にも劣るまい。されば先づ程近き鎌倉に赴むい

山を降て鎌倉へ

て、名僧善智織を訪ぬるに如くはないと、ここに旅装を整へて、半夜密かに山を下つた。

歸省兩親に見ゆ

かくて蓮長は、一まづ小湊の卿里に歸つて、久しく會はなかつた懐かしい両親に見え、さらに、

「一子出家すれば、九族天に生るゝとか、私既に佛門に入りし以上、三寶國土の御恩に酬のまいらせ、あはせて一切の衆生を濟度せむとするのは、平生私の願ひとせし所、されば縦し今生にては、御傍に仕へまつること叶はずとも、大縁だに結ばらば、未來永劫、必らずお側を離るゝこともござりませすま

す」

と述べ、互に頼み合ふて、愈鎌倉に向つた。時は仁治元年、蓮長十九歳の時。

念佛の頑迷に驚く

蓮長は、道を上總から下總にとり、蓬草茫茫たる武藏野の露を踏み分けて、漸く程ヶ谷なる帷子の里に辿りついた。かくて、とある破額屋に一夜の宿を頼めば、主人は快く之を諾して、蓮長を圍爐裏の傍に召じ、

「被て寝る物もないが、燃き火で明しさつしやるなら、宿めて進ませせう。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛」

と、只管若き旅僧の勞をいたわつて、話はそれからそれへと運ばれる。

話は兎角宗門のことに及び易すかつた。宿の主人は、佛法修行の爲、鎌倉へ参るのだと聞いて、カラ／＼と打ち笑ひ、

山を降て鎌倉へ

「鎌倉へ行かしてやつたら、釋迦よりも樂師よりも、まづ大切な大阿彌陀佛を拜まつしやれ。西方彌陀の淨土を頼むで、南無阿彌陀佛を唱へるのが、極樂往生の何よりの捷徑。此處釋迦牟尼佛の木像など祭るのは、往生安樂の障げぢやと聞くからは、木偶同然の此處物。薪代りに焼いて了うが、何よりの御馳走……」

と、今にも爐に投げ入れむとするを、

『さても勿體ない。何とてかゝる無禮をなさるゝぞ』

と、蓮長は眉を翳めて推し止むれば、主人は臆する色もなく、

『いや／＼我念佛宗では、阿彌陀佛が聖像で、聖經には、三部經があるばかり、大阿上人の説法にも、「其地は無用の佛、無益の經なれば、末世の我等が修行には、この念佛に如くはない」と仰せられてあります。こんな木偶同

然の物に、何の無禮がありませんぞ』

と答へて、又カラ／＼と打ち笑ふ。餘りに意外なる主人の言を耳にして、

『これ果して眞實か、將又方便か。鎌倉に入らば、まづ此念佛宗から究めて

見よう』

と、心深く思ひ定むる所があつた。

九 念佛宗の研究

鎌倉に辿りついた蓮長は、笈を車大路の宿に下ろしたが、さしもに繁昌を極むる巷のさまには目も呉れず、さりどて又名所舊蹟を探らむともせず、或は法話に、或は讀經に、只管世尊の本旨を究めやうと、唯そのみ力めて休まなかつた。

その翌朝蓮長は、當時鎌倉に在つて、専ら念佛宗の弘布を圖りつゝあつた法然上人の法孫、然阿上人を材木座の光明寺に訪ね、刺を通じて上人に謁し、親しく念佛宗の正旨を究めたいと請ふた所、快く之を諾かれ、法然上人の著、『撰擇本願念佛集』を授け、暫らく當山に留つて、經文を繕げよと、懇ろに慫慂められた。

法然上人は名を源空といひ、美作國久米南條郡稻岡の人で、自から念佛宗を創め、他方本願の道を見出して、世に所謂「智慧第一法然」と謳はれた程の俊才であつた。だから日々上人の傘下に来つて、其法話に隨喜渴仰の涙を流す者數知れず、上は貴霜より下は庶民に至るまで、恰かも暗中に光明を得たものゝ如く、互に相喜び合ふのであつた。

されば將軍頼經を輔けて、天下に號令しながら、只管泰平の治を圖りつゝあつた時の執權北條泰時の嫡孫經時の如きも、まづ之に歸依して、蓮華寺を建立し、然阿を其開山とした位である。以て念佛宗が、當時如何に歓迎せられて居たかを察することが出来る。

蓮長は、日夜孜孜として經書に目を晒し、成は法座に列り、只管其宗旨を究めて居たが、一日、霧ヶ澤にあつて、極樂往生の法門を説きつゝあつた大阿上人が、世にも恐ろしい病に罹り、晝夜を分たす悶え苦しむ、叫び藻掻いたその果は、竟に虚空を掴むで往生したことを聞き、世に道徳圓滿の聖者と謳はるゝ大阿上人が、數年修行の甲斐もなく、かゝる往生を遂げられたのは、必定釋尊の御旨に叶はざる假りの教を播げた嚴罰だと思ひ、而も其宗旨も早や既に看破ぶる所があつたから、之より廣く各宗の本山に遊むで、其蘊奥を究めむとし、私かに會心の笑みを漏したが、それにしても、一たび故郷に歸つて、兩親や恩

師の安否を問はむと、孤杖草鞋、飄然として復た小湊の故里に歸つた。

一切の衆生を救ひ、天下の諸宗を統一せんとの大願をかけ、既に世塵をのがれて、墨染の身に精進の身を包み、肅かに兩親の前に跪いた時、生死を離れた心なき衣にも、追がに世の常の涙なきを得なかつたであらう。

次の日は、懐かしき清澄寺に上つて、愛しみ深かりし道善法印と、互ひに久瀾を叙しながら、時を忘れて昔を懐ひ、今を語つた。かくて山に在る間、連長は多年の蘊畜を傾倒して、『戒體即身成佛義』と云ふ一卷を著した。

僧房の春は閑かにして暮るゝこと遅く、唯茶山花の落つる音が、時折り物靜かな山門の空氣を搖がするのみであつた。

一〇 叡山時代

故郷に歸つた連長は、尙ほ進むで南都北嶺の學風を見、また諸宗の本義をも究めむとし、之を師父に議つて、その年再び鎌倉に出で、次で愈叡山に留學することゝなつた。叡山留學と云へば、今の海外留學のやうなもので、當時青年僧侶の大希望であつた。

叡山は延暦年間、傳教大師の開かれた所で、戒壇禪房臺を並べ、峰巒綠樹の蔭濃かなる所、香煙雲の如く、一山三千の大衆は、日夜孜孜として、或は經書に、或は法筵に、何れも佛法の奧義を求めむとし、一方より見れば、實に學問觀法の大學で、また一つには、音樂美術の大叢淵であつた。

連長はこの中にあつて、叡山の四俊と謳はれて居る靜明、經海、心賀及び尊海と親しみ、殆ど寢食を忘れて勉勵して居たが、その天才と博識とは、乍らにして一山の知る所となり、推されて東塔圓頓坊の住職となり、次で横川香谷な

る定光院をも兼ねることとなつた。かくて法界の鳳鸞は、心靜かに佛天活躍の機到るを待つて居た。

ある日蓮長は、天台宗の教義について、沈思黙考しつゝあつたが、慈覺大師の教旨に矛盾あるを發見したから、尊海に向つて、

『傳教大師が天台の教旨を體得し、唐から歸つて開かれた宗門の中には、眞言・戒律・禪の三宗をも含むで居るに拘はらず、法華經述門に悖る所はないが、慈覺大師が眞言の印契を得て、唐から歸つてからは、教理著しく法華經の正意に背くものあるは、これ正しく宗旨の退轉だと心得まする』
と、膝を進めて疑義を質したことがある。尊海は之に對して、

『傳教大師は、顯教の妙味は解して居られたが、密教の醍醐には未だ達し居られなかつた。之に反し慈覺大師は、顯密双つながら會得して居らるゝ』

とて、大師の金剛頂經と蘇悉地經の疏とを示された。蓮長は深く之を精讀し、日を経て再び尊海に向ひ、

『慈覺大師は法敵である。佛敵である』

とて、其正邪曲直を論じ、只管傳教大師の宗旨に復へらむことを痛論したが、尊海は黙して之に答へず、唯々驚きの目を睜つて、其學殖の深遠なるに驚くのみであつた。

或朝蓮長は、夙く起き出で、佛前に香を焼き、日課の讀經を訖ると間もなく、一山の學僧を集むる鐘の音が響いたので、いそぐ赴いて、講堂の法筵に列つた。やがて講主は、講堂の學徒に向つて、

『法華經と大日經との差別如何』

その問題を提出して、大衆の答案を促した。滿堂肅然として、誰一人口を開く

者なく、四俊も口を閉ぢて黙思して居たが、蓮長は坐を進めて、

『法華經は醍醐の極説であつて、大日教は生蘇味の權教。其徑庭は天地雲泥も管ならず。故に二教は日を同じうして論すべきものにあらず

それ法華教第一とは、世尊が自から説かせ給ふた所でござるが、弘法大師は、法華經を目して、戲論であると貶なされ、慈覺大師は、弘法の眞言に私淑して、理同相勝の説を立て、法華經の醍醐純味に、眞言の濁醪を混せられたるは、正しく佛法の本義に悖るものでござらう』

と、聲も朗かに忌憚なく答へた。

三千の學徒は之を聞いて、驚きの目を瞳つて居たが、一山悉く慈覺大師の教に迷つて居たので、蓮長の法統復活論に耳を傾くる者は甚だ尠かつた。蓮長は我説の容易に容れられざるを悟つて、此を去らうとしたが、尊海が切りに之

を留むるので、尙暫らく足を叡山に止めて、ますく「經山の峻、學海の深、尙ほ且つ之を攀ぢ、之を涉らねばならぬ」との志を懷き、日夜只管未見の書を涉獵するのであつた。

一一 八宗兼學

轉然として心境開く

練行約五年、三塔の經疏も今や殆ど讀み盡くしたが、法華經を繙くに及むで、心境轉然として開け、さらに傳教大師の著書を読んで、心大いに期する所があつた。見よ傳教大師の遺書には、

『我日本國は、圓機既に熟す。法華教弘通の代を語れば、象の終り、末の初地を尋ねれば、唐の東鞏の西。人を原むれば、五濁の世鬪諍の時云々』

とある。蓮長は此一卷を讀むで、

「然矣我が起つべき時は正に近いた」

と、心中大に決する所があつた。是に於て其志を尊海に告げ、寛元四年、年二十五にして三井寺の戒壇に、智證大師の宗風を尋ねることゝなつた。

智證大師は、弘法大師の外甥に當り、幼名を圓珍と稱し、稟性穎悟、八歳の頃すでに因果經、孟子、論語、漢書文選を修め、十四歳の時叡山に上つて、座主義眞法師の薫陶を受け、學徳大に進み、仁壽三年唐に入り、瑜珈、胎藏、金剛の密旨を究め、その上千餘の經卷を携へて歸朝し、専ら胎密の調和を計り、終には三井寺の開基として、一代に尊崇せられ、其名は畏くも九重の奥に達した。

ここに留ること半歳。蓮長は殆ど其藏書を讀み盡したが、其宗義如何にも釋尊の本旨に悖る所あるを認め、ここを去つて興聖寺の道元和尙及び普門寺の圓爾和尙を訪ね、曹洞臨濟兩宗の正義を問ふことゝなつた。二僧は其頃宋より歸つて、意氣昂然、やゝ蓮長を侮るの風を示したが、相知るにつけて、其學殖見識の高く一世に超越せるものあるを認め、後には衷心から之を畏敬し、之を當時泉涌寺に來錫中であつた宋國西蜀涪江の僧道隆禪師に紹介した。仍つて蓮長は、師に就て見性成佛の法を學び、逗留三星霜の間に、眞言、淨土、天台及禪の諸宗を究め、更に進むで古宗の研究に志した。

そこで寶治二年、二十七の年奈良に赴き、三論宗の本山元興寺を訪ふて、龍樹菩薩の中論、十二論及び提婆菩薩の百論を讀破し、次で興福寺に入つて唯識俱舍兩旨の研究を了へ、其上八宗兼學の稱ある東大寺に抵つて、深く華嚴宗の眞底に觸れ、今や南都北嶺の經藏も、早や餘す所なきに至つた。

復び郷里に歸らむとす

孝心深かつた蓮長は、兩親のこと忘れ難きまゝ、復び故郷に歸つて、兩親の安否を問はむと、既に旅装を調へて泉州に向ふたが、途に偶江川太郎左衛門吉久に會つた。吉久は蓮長が世の所謂沙門の徒と選を異にせるものあるを看取し、其家に伴ふて何くれとなく款待し、更ふくるまで、その齒玄崇高なる法話に隨喜の涙を催した。

かくて蓮長は、ある日堺の浦に達した時、偶々郷人に邂逅し、具さに其消息を聞いて、稍安堵したるものゝ如く、彼は郷人に向ひ、

「蓮長が郷里を出で、から、既に七年にもなるが、其間一度も歸省しないのは唯々九仞の功を一簣に欠ぐの虞あるからでござる。しかも志成り業遂げた

曉には、必ず歸つて、兩親の御顔を拜するであらう。どうか、此上五六年の

お暇を被下るやう、御傳へ被下れ」

と頼むで、飄然また南都の空へ立ち歸つた。

高野山に遊ぶ

聽て蓮長は、生駒郡都跡村なる唐招提寺に至つて、三分律の教義を究め、さらに一切藏を薬師寺に學び、次で法隆寺を訪ふて、法相宗の經書を閲し、此に全く六宗の蘊奥を究めたが、蓮長の志は益大を加へて、こたびは紀州高野山に上り、徐かに其奥義を探ぐらむかと思ひ立つた。

それ高野山は、眞言密教の大本山で、弘法大師空海上人の開かれた所である。大師は讃岐人、始め石淵寺の僧勤操に師事し、延暦二十三年、唐の諸山に名僧

智識を訪ね、後青龍寺の阿闍利に就て、眞言の正義を修め、識徳極めて高く、殊に其辯に至つては、洵に一世の雄であつた。大師は大同元年、唐より歸つて一宗を開いたが、平城上皇之に歸依し給ふに至つて、天下靡然として、其宗風に傾いた。

蓮長は高野山に在つて、荐りに其經書を繙き、その奥義を求めたが、清澄山以來、其宗旨を知つて居たので、逗留久しからずして、其志を達し、勿々山を下つて、河内の聖靈院叡福寺に抵つて、聖徳太子の靈廟を拜し、さらに男山に詣で「世尊の正法を究め、一切の衆生を濟度せむ」との大祈願を凝らし、之より儒學研究の志を懐いて、二たび南都の人となつた。

るの奇遇に驚く

如此くにして、蓮長の學識と信仰とは益進み、この上さらに學ぶべき必要もなかつたが、大祈願を懐ける蓮長は、之に甘せず、天王寺屋淨本の紹介で、大學三郎能本を訪ねた。しかも何等の奇遇ぞ。その能本は、賴朝の乳母比企禪尼の義子比企判官能員の末子であつたとは！

この奇遇の一齣を語るには、まづ二十年の昔に溯らねばならぬ。能員の女若狭の局は、將軍賴家の寵愛を一身に鐘めた幸福な人であつた。故に其子一幡は、當然軍職を襲ぐべき運命の下に置かれて居たが、二位の尼政子の陰謀によつて、關西の地頭職を其子の千幡に奪はれたから、局の父能員は大に之を怒り、賴家と通じて、北條氏を滅さむとしたこと、早くも時政の知る所となり、能員の一族は、却つて北條氏の爲に滅されて了つた。されば當時僅に三歳に過ぎなかつた三郎も、危く誅せらるゝ筈であつたが、其一族に當れる僧伯耆坊の哀

願によりて辛くも一死を免れて、直に安房の國に流された。

蓮長の父重忠は、過ぎ去つた自己の運命に思ひ合はされて、この痛ましき流竄の人を遇するに、親切の限りを盡くしたのである。程なく三郎は、伯耆坊に伴はれて、京都に出で、表面は出家を理由として、東寺の傍で儒學を修むることとなつた。三郎の才學は、忽ち濟輩を抜いて、令名四方に傳はり、其名畏くも天閣に達するに至つた。

然かるに何といふ不思議な縁であらう？。二人は圖らずも茲に邂逅つて、互に云ひ知れぬ懷舊の情につまされつゝ、何くれとなく、蓮長を款待し、懇に之を勞つた。

儒教國學を學ぶ

かくて三郎能本は、蓮長の志を聞いて、大に之を喜び、

「あいや、そのことなら、拙者は以前小湊で、御兩親に深い深い御恩を受けた身であれば、拙者の存じ居ることは、何なりとも御傳申すでござらう」
と、快く承諾して呉れたので、蓮長は三郎能本の家にて、四書五經はじめ、諸子百家の書を讀破して、儒教の大要を會得し、更に國學を修めむと思ひ立ち、能本の紹介で、冷泉爲家に師事することとなつた。

爲家は定家卿の子にして、歌道の造詣甚だ深い人であつた。蓮長は爲家について、まづ古事記萬葉集を修め、さらに諸家の家集、及秘書古典の類を精讀吟味し、約半歳にして略ぼ其大要に通じたので、爲家も其穎才に驚き、ことに其筆の巧なるを見ては、古の三蹟にも劣らぬ名筆と賞め讃へ、秘藏の歌書を出だし、標題の揮毫などを求むるのであつた。

佛天の雛鳳は、如此くにして天下の諸學に通曉し、讀むべき書、修むべき學は、早や既に餘す所なかつた。が、尙ほ東寺、仁和寺、天王寺の戒壇を尋ねて、眞言を究め、舊記を閲し、建長元年二十八の年、再び叡山に赴いて、定光院に抵り、専ら天台大師の摩訶止觀を閲することとした。

二二 日蓮の大抱負

摩訶止觀は、法華圓妙の法に據つて、一念三千、十乘觀法を説明せる宗門不朽の寶典で、法華經の妙音眞理は、收めて此中に在りと言つても可い。蓮長は十四年研鑽の功を積むで、多年苦しみ懊むだ心靈上の疑問も、今ははや釋然としてとくるに至つた。かくて、

『法華教は、圓教である。實教である。諸經中王最爲第一の經文である。之

を外にして、釋尊の正意に適ふ經典はない』

と云ふ一大鐵案を下した。

是に於て、法華經に對する蓮長の信仰は、益強熱を加へ、之が弘通の方法についても、殆ど寢食を忘れて、沈思默考したが、吾人は之を、熱烈なる感情と、半乎たる覺悟とを以て、其歸結に邁進せる蓮長その人の告白に聽くの賢なるを信するのである。

『佛法を習ひ極めんと思はば、暇あらずば叶ふべからず。暇あらんと思はば、父母、師匠、國主等に隨ふては叶ふべからず。是非につけて、出離の道をわきまへざらんほどは、父母、師匠等の心に隨ふべからず。恩を棄て、無爲に入るは眞實の報恩者なり』云々。

此の如く存じて、父母、師匠等に隨はずして、佛法を伺ひしほごに、一代聖

教をさとりべき明鏡十あり。所謂る俱舍、成實、律宗、法相、三論、眞言、華嚴、淨土、禪宗、天台、法華宗なり。此の十宗を明師として、一切經の心を知るべし。世間の學者等思へり。此の十の鏡は、皆正直に佛道の道を照らせり。小乗の三宗は暫らく之を措く。大乘の七經こそ、生死の大海を渡りて、淨土の岸につく大船なれば、此を習ひほどいて、我が身もすゝみ、人をも導かんと思ひて習ひ見るほどに、大乘の七宗、何れも自讃あり、我が宗こそ、「佛の教化」一代の心は得たれ、等云々。——(諸宗の祖師を列擧す)——我等凡夫は何れの師なりとも、信するならば不足あるべからず。仰いでこそ信すべけれども國主は、唯一人なり。二人となれば、國土おだやかならず。家に二の主あれば、其家必ずやぶる。一切經も亦此の如くやあるらん。何れの經にてもをばせ、一經こそ一切經の大王にてをばすらめ。而るに十宗、七宗ま

で各々諍論して隨はずば、國に七人十人の大王ありて、萬民おだやかならじ。如何せんと疑ふところに、一の願を立つ。「我れ八宗十宗に隨はじ」、天台大師の専ら經文を師として、一代(諸教)の勝劣を勘へしが如く、一切經を開き見るに、云々。』

如此くにして東海の一沙門蓮長は、愈法華教の行者たるべく、今や慨然として起つに至つた。

『代を語れば像の終、末の始。地を尋ぬれば、唐の東翔の西。人を原ぬれば、即ち五濁の生、鬪諍の時なりとか、されば妙法開宜の地、正法開顯の地は、即ち此日本である、然矣この日本こそ、上行菩薩示現の地であらねばならぬ。而してこの偉大なる妙法弘布の使命を負つて立つ者は、蓋し我を以て、その

第一人とすべきであらう。』

と、自ら任じて奮ひ起つた蓮長の瞳は、何物をも焼き盡さずむば休まざる焔の如く燃えて居た。

一三 日蓮天命を知る

日蓮と古來の豫言

既に天命を知れる法華經の行者蓮長は、古來の豫言を見るに及むで、愈々我が使命の大なるを感じた。心私かに思へらく、

『天に日あり。國に王あり。家に柱あり。人は魂あるが如く、一切の結論は、唯この一卷に求めねばならぬ。即ち法華教は、末法萬年に弘布すべき唯一の經典で、二十四品の法華教中、其迹門は釋尊の藥王、藥上等の諸菩薩に託し

て、正像二十年の間に弘通せしめ、本門は即、上行菩薩に命じて、末法の世に弘通せしめ給ひ、末法に法華經を弘むる行者あらば、上行菩薩の示現と思へ』と仰せられ、更に佛識には、『末法の五百年。東海の小國に現はる』と垂示せられ、彌勒菩薩の瑜珈論には、『東方の小國あり、其中唯大乘の種姓あり』と識され、觀經疏には、『佛日西に入りて、遺耀將に東に及ばむとす。此經典東北に緣あり』と示され、特に傳教大師は『代を語れば像の終、末の始。地を尋ねれば、唐の東、羯の西。人を原ぬれば、即ち五濁の生、鬪諍の時なり』と末法の始めに記された。これを以て之を觀れば、正に我日本こそ、上行菩薩示現の地であらう。然矣妙法開宣、正法開顯の地は、我日本を措いて、外にはない。而して入末以來既に二百年。今や妙法の弘布を圖るべき上行菩薩は、唯我一人である。唯我蓮長一人であらねばならぬ』

日蓮天命を知る

六三

と、深くも思ひ定めた行者蓮長の志は、宛然泰山の儼として動かざるが如く、如何なる天魔破旬の來るとも、さらにびくともする心はなかつた。

復び故里に歸る

そこで蓮長は、一たび故郷に立ち歸つて、久しく會はなかつた兩親の安否を尋ね、また恩愛深き師の坊にも謁した上、いよく法華教の弘宜流布に努めやうと、その親しき法友尊海等を訪ねて、堅き決心の程を示し、多年の厚誼を謝すれば、尊海もいたく別れを惜しみ、滂泡たる涕涙を法衣の袖に拂ひながら、『この上は、唯々佛勅に従つて、勇往邁進、法華教の弘通に力められよ』といひつゝ、容を改めて禮拜するのであつた。

かくて蓮長は、建長五年彌生の始、盡きぬ名残を法友知己に惜しみながら、

花亂れ咲く京洛の春を後にして、そよ吹く春風に、法衣の袖を弄らせつゝ、滋賀の浦曲もいつしか越えて、粟津の原を過ぎ、石山の下を経て、勢田の橋へと差しかゝれば、懐かしき澤國の雲煙眼前にせまつて、云ひ知れぬ離愁の情自づから胸底に湧いて來る。と忽ち想ひ起したのは、かの承久の亂。

王師脆くも宇治瀬田の戦に敗れて、賊軍は宛然洪水の堤を決するが如く、忽ち京洛に攻め入つて、公卿を斬殺し、三上皇を幽閉して、之を遠島に遷し奉つたと云ふ義時の大逆無道をきくにつけ、悲憤の涙抑へ難く、さらに一天萬乗の君にして、かかる屈辱を受け給ふに、所謂名僧智識の大祈願が、何等の法力をも現はさなかつたのは、知らずこれ王道の過か、將た佛法の咎めか、二つの中何れにか歸せねばならぬ。が、思ふにこれ沙門等が、所謂「魔者の邪法」を修

めた爲でなかつた乎、そもく法華經は、末法唯一の正法にして、また唯一の妙法である。されば之を蔑如し、之を度外視する者は、やがてこれ教主世尊に弓をひき、武臣としては王者に背く者、斷じて沙門と云ふべきではない。故に釋尊も『魔作沙門。壞亂正法』と説かれたことがある。見よ我日本に於ては、嘗つて傳教大師が、法華經正意の弘通を圖つたのみで、其後は弘法も、慈覺も智證も之を度外視し、之を蔑如し、天台の宗旨さへ眞言の邪法の爲に半は誤まられて、滔々たる今の沙門は、殆ど總て正法の破壊者である。されば此法敵と戦つて、眞理正道の光を求め、一切衆生を濟度して、國恩に報ずるのは、これ我が蓮長の使命であり、また天職であると思ひ定め、人知れず悲憤の涙を澱ぎ、法華經を誦して、兵共の菩提を弔ひ、矢橋、草津を過ぎて、伊勢路へと向つた。

伊勢大廟に祈る

かくて間の山なる淨明寺に、相識の住僧を訪ね、その翌朝まづ我一宗開創の志を國祖天照大神に奏し奉らむとて、大廟の御前に跪き、丹精をこめて、經文を読み、澄したる後、恭しく威容を改め、

『天照大神は、本地久成の釋尊に在はしまし、跡を秋津洲に垂れ、衆生の利益百萬餘載、正像二千年が其間は、法華沙門を以て、御威光も耀きたれど、今は末法萬年の始に入つて、白法隱没の時に達し、天魔破旬世に蔓り、妙法を開顯せざれば、到底閻浮提の人を化導して、十界平等の果を收むることは出来ぬと思はれまする、蓮長數ならぬ身には候へども、此國に生れて、此時に逢ひたる上は、妙法弘通の爲に、身を擲つて、末法五濁の闇に迷へる一切』

衆生を濟度せむとの大誓願を起し申しぬ。仰ぎ願くば、廣大無邊の神助を垂れて、この大願を遂げさせ給へ』

と、一心不亂に大祈念を凝せば、神殿の扉サツと開きて、金色の光赫灼として四邊を照し、

ちぎるぞや、みのりの花の春と秋、同じ心に山を守りて

と詠じ給ふ神の御聲に、靈感を覺えて、さらに禮拜すれば、神殿の扉は、自ら閉ぢられたのであつた。

蓮長は信心肝に銘じ、只管如此き奇端を打ち喜びて、法樂の誦經を宗廟に供奉り、此上は、我は唯我が行くべき道を行いて、斃れて後休まむと心に誓ひつゝ、故郷の安房に立ち歸つた。

時に建長五年の春。年三十二。

一四 故山の日蓮

故山の春は懐しかつた志を決して南都北嶺に諸宗を究め、學を修むること越に十有餘年。今や業を卒へて小湊の里に歸れば、兩親は嬉し涙に咽びつゝ、暫時が間は言葉も出なかつた。

孝心深き蓮長は、兩親の胸中を察して、この喜びも東の間と思へば、追かに云ひ知れぬ哀感のその胸にせまるを覺えつゝ、

「出家の身は、何時までも御膝下に在る譯にまいらず、再び御別かれせねばなりませぬが、必ずお歎き遊ばしますな、一旦大縁を結ばらば、未來永劫決して御側を離れませぬ。いづぞや母上も仰せられたやう、共に佛門に入つた心で、何事も忍ぶと御一言、蓮長決して忘れは致しませぬ」

と申せば、重忠夫婦は氣を取り直して、互に心を勵まし合ひ、何くれとなく款待し、親族郷黨も打ち喜びて、何れも其家を集つて來た。

次の日は、父と共に清澄山に赴き、師の坊を訪ねると、道善法印を首め、一山の衆徒蓮長の到るを今や遅しと待ち受けた。

既に六十の坂を越えた道善法印は、見るからに腰は曲りて眉は霜の如く、額の皺も著しく殖えた。法印は嬉し涙を兩眼に満えつゝ、蓮長を方丈に導き、

『お、蓮長か、一別以來十餘年の長の年月、御坊の歸山を待ちかねた心には夢にも顔を見て、早う安堵したかつたのぢや。それにしても、學識は定めて進まれたことであらう。』

と、春風の如き温き心をもて、切りに蓮長を款待すのであつた。

今や宗旨を異にする蓮長は、假合法の爲めとは云へ、如此き恩師に脊かねば

ならぬ我運命の悲しきに思ひ到つた時、坐ろ愁涙のはふり落つるを禁じ得なかつた。

話頭は諸國の風俗から、南都北嶺の宗風、及び、偶世の所謂名僧知識のことに及べば、

『名僧と云ひ、知識と云ふも、口に御經を誦しながら、心に誦するものはござらぬ、唯々朝に經を讀み夕に法を説き、一切衆生の佛種を絶つて、無間地獄に墮さうと大汗かいて働いて居るばかり。謂はゞ經藏の蠹魚同様で、身には、七條金襴の袈裟かけて、生如來と拜がまれても、法衣一枚剥いたらば、何れも天魔外道の正體』

と、涙ながらに物語り、又宗風の近狀を問はれては、具さに其狀を説き出づるも、一言眞言のことに及べば、話頭は毎時他に轉ずるのであつた。そこで法印

は、道がにそれと察し、日外孰れの宗派が釋尊の正意に適へるかを問ふた蓮長は、多年の修學によりて、必定今は他宗に、心を傾けたであらう。さても本意ないことかなと、撫然として蓮長の言葉を聴くのであつた。

蓮長は父を歸へし、一兩日山に留つて、二たび家に歸れば、父母の款待は常に變つて、慇懃を極むるので、蓮長もいたく怪しみて、其故を訊くと、父重忠は、いと心得顔に、

「御身は我子とは言へ、法の爲には教の主。御身の學徳は師の坊を凌いで、世にも尊く思はるゝもどく師の坊には、御身に跡を嗣がせやうとの所存。然るに此間の物語中、師の坊には何となく本意なげに見えさせ給ふた。その折我眼には、御身の胸中、必ずや大願あるに相違なしと見て取たのぢや」と、蓮長の意を窺へば、父が我胸中を察した嬉しさに、膝を進めて、

「さても驚き入つた御眼力、仰せの如く蓮長には一宗創設の志を樹て、近々の中必ず世上に開宜いたすでござりませう。故山を出で、十有餘年の長い年月。各宗の奥義を探り、諸學を究めて、終に末法萬年。一切衆生を濟度する眞理正道は、唯法華教一卷に藏められてあるのを看破し、此上は自から法華經の行者となりて、此身命を抛ち、以て釋迦牟尼世尊の附託に酬るまいらせむと存じます。由來新宗開創の前には、法敵現はれ、生きては流竄、死しては墓をも毀たるゝ習ひ、この蓮長が一宗を立つれば、必ず法敵四方に起つて、幾多の天魔破句この身に襲ひ來るは明なれど、法の爲には何の恐るゝ所がござりませう。幸に御心遣ひ遊ばすな」

と、始めて年來の宿志を、兩親の前に告白した。母梅菊は「氣ばせ狂へる乎」と打驚き、さる危険を冒さうより、師の坊の御

跡をついだ方が、御身の爲であらうと、切りに説き伏せむとするのを、父重忠は流石に動く心も見せず、

「大丈夫生れて世に出づ。争かでか醉生夢死してよからうぞ。好し好し法の爲に身命を擲ちて、妙法を弘布するに努められよ。思へば懷妊の時の靈夢も、正しく今日の奇端であつたであらう」

と言ひ終つて、妻の梅菊を願れば、妻も今は始めて打ち領き、蓮長は茲に全く其許諾を得たのであつた。

一五 日蓮の開宗

旭の森の大祈願

奮然として一たび起つた蓮長の前には、所謂名僧知識は固より、王侯將相と

雖も、何等の權威をも有たなかつた。

時は建長五年丑の初夏。四月二十八日の未明。徐かに起き出でた蓮長は、心して精進潔齋し、森の下道を辿りつゝ、清澄山の一角なる旭の森に分け入りて、宛然金輪際から生えぬいた大磐石の如く、威容嚴かに東海の天を仰いでつツ立つた。

萬籟寂たる天地の間に、唯一人矗立つた蓮長の姿の如何に尊嚴なりしことよ！。薄紫の光漂ふ海の際から、煌々たる靈光を迸らせて、看る／＼さしのぼる朝日の影が、半その顔を露はした時、忽ち唱ふる題目の聲。

南無妙法蓮華經！

獅子吼の如き大音朗かに、續く二聲。

三聲！。

四聲！

五聲六聲十聲と、曙の静けさを破つて、鯨波の如き其聲は、山から山。谷から谷へと、笈しわたり、磐石不動の姿は、唯看る赫灼たる旭日の光を浴びて、其肉體は天地と共に同化し、昇る朝日は其聲と共鳴して、舞ひ廻るかと思はれ、森羅万象悉く法界の光明に溶け去るが如く輝き渡つた。

かくて一宗開立の式は、天と旭とに向つて、いとも壯嚴に行はれた。

清澄山頭の宣言

この日清澄山の戒壇では、多年修學の功を積むで歸つた蓮長の説法があるといふので、一山の大眾を首め、遠江の老若男女。或は漁を休み、鋤を捨て、我もくと法筵に詰めかけた。中には東條の地頭、東條左衛門景信も亦、威儀

を正して、上座を占めて居る。間もなく法鼓の音鳴り響けば、香染の法衣肅かに、蓮長法師の姿は法壇の前に現はれた。

いでや之より命のあらむ限り、三類の法敵と戦つて、他の權教を撃滅し、力のつゝかむ限り、我妙宗の開顯弘布に力めやうと奮ひ起つた蓮長の意氣信念は、まさに天をも衝かむ勢を示し、肅然たる満堂の聽衆は、今や遅しと、敬耳を聳て、その語り出づるを待つて居た。

蓮長は屹と會衆に向ひ、

『蓮長多年の妙行によりて、微妙の大法を感得し、釋尊の附託をうけ、一切の衆生を救はむとて、會衆列位を招いたのでござる。そもく其大法とは、一念三千、如來の秘法華教を申すのちや。釋迦世尊の説かせ給ふた經典は、數限りも御座らぬが、法華經は即ち、末法萬年に弘布すべき妙宗で、諸經王、

最爲第一、釋尊本因妙の萬言、本果妙の萬徳は、一切この經中に備つて居る。故に之を外にして、正宗もなく、實教もなく、佛教即法華教、法華教即ち佛教で御座る。

然るに淨土宗の法然は、選擇集を著して、小乗下劣の念佛を弘め、律宗は小乘を以て、大乘の地を汚がし、禪宗は甚しく聖教を蔑如し、眞言は大日如來を本佛とあがめ、弘法は大乘法華の經王を第三戲論と唱へ、慈覺は事相の三密は、最勝義の法華經に勝るとて、事同理勝を説き、法然は捨閑闍拋を唱へて、法華經は末法無益なり、捨てよと説き、榮西は唯實無權の法華經を閑文字だと教外別傳を立てた。

如此く宗派多岐に分かれて、妙法を蔑如するのは、一切衆生を手引して、無間地獄に墮すものである。『魔作沙門、壞亂正法』とは世尊の説かせ給ふた

所。國に二つの王あらば、その國必ず亡ぶと云ふのはこのことである。

念佛無間。禪天魔。

眞言亡國。律國賊。

今の世に奉すべき正宗は、法華教の外に何がある。世尊の宣はし給ふ圓頓の教とは、法華教のことぢや、聞かつしやれ諸の會衆。この教を奉ずる者は、獨り得脱し、成佛することが出来るのぢや。ゆめ凡俗僧輩に誤まれて、無間地獄に墮つまいぞ。

かく申す蓮長は、如來の遣使、法華經の行者ぢや。南無妙法蓮華教。と、左手に高く法華經を捧げて、聲高かに題目を唱へたのだから、眞言の靈場は、乍ら鼎の沸くが如く、怒號、喚叫、罵聲、宛然火事場のやうであつた。

一六 會衆の激怒

由來宗門の諍ひ、法敵の怨ほど激しい者はない。眞言の靈場で、我宗旨を蔑如し、其教を罵倒した蓮長の説法に對する會衆の憤怒は、正にその最高潮に達し、

「賣僧奴」

「外道奴」

「惡魔奴」

「狂人奴」

と罵倒し、絶叫し、怒號する聲は、一山を動かすばかりであつた。ことに清澄寺の老僧圓智坊は、滿面朱を濺いで、言葉も切れ／＼に、

「馬鹿奴。疾く去れ」

と詰めかゝる。東條左衛門は、「念佛無間」と喝破されたのと、二十餘年の昔、我が請ひを容れなかつた二つの恨重つて、乍ち刀の柄に手をかけ、猛然として起ち上つた。それと氣づいた道善法印は、之を制しながら、

『ヤレ待たしやれ。東條殿。こゝは靈場、御立腹はさることながら、蓮長は氣が狂つてござる。直ぐさま破門して山を追ひ出すであらう程に、枉げて御容捨あらせられい』

と宥められて、景信は睨みながら、堂を立ち去つた。

慈愛深き道善法印は、涙ながら、蓮長を召して、言葉靜かに、

『さて／＼困つたことになつた。この場で心を翻さば可し。さなくば、疾く疾く何れへなりとも、立ち去られよ、必ず屹度東條殿の目に觸れまいぞ』

と、私に論じて、今は法敵の弟子ながら、尙且つ其行末を思ひ煩ひつゝ、撫然として涙を呑むだ。

蓮長は素より、「如何なる天魔破句が我身を襲ひ來るとも、日本國土のあるかぎり、縦し父母の首は刎ねらるゝとも、法華經は捨てぬ。我は日本の國柱、日本の眼目、日本の大船となつて、必ず佛恩に酬るまいらせねばならぬ」と大願かけて居た身には、かゝる法難の如きは、敢て意に介する程でもなかつた。蓮長は恩師の言を聞いて、深く海岳の恩を謝しながら、其儘下山の途に就いた。衆俗の嘲笑、罵言、讒謗を耳にしながら。

一七 危機屢到る

泰然として山を下り行く蓮長の背後から、「オーイ〜」と呼かけながら、追

かけて來る者がある。屹とふりかへり見れば、日頃親しかつた清澄寺の徒弟淨顯坊と、義淨房との二人であつた。二人は東條左衛門の怒未だ釋けざるを思ひ、必定下山を待ち伏せて、蓮長を一討にせうとの企計あるに相違ないと思つたので、態々蓮長に其旨を告げ、問道から下山するやうに説き勧めるのであつた。然るに蓮長は、

「愚僧は他宗を論駁して、一宗を開立せむとするものなれば、法敵の天下に充ち満ちて、我に危害を加へむとする者あるは、かねて覺悟の前でござる。殊に人生の嶮は、山にあらず、水にあらず、唯その人の心に在るのでござる。されば一介の武人左衛門の如きは、毫も我が恐れざる所、御好意は千萬辱いが、左程お氣遣ひ召さるな」
聞くより二人は、法衣の袖をしかと摺り、

『いや〜君子は危きに近よらずとか、御身今誤つて、敵の毒手に斃るゝが如きことあらば、宗門の爲、衆生を救はむとの志を誰が繼ぐのでござる。サ、我等二人が案内いたすでござらう』

と、やつと説き伏せて、間道を探び、崎嶇たる山路を攀ち、谿谷を踰え、葛に縋りつゝ、辛うじて西條村なる華房の里に遁れ出で、二僧の斡旋で、暫時この地の一小寺青蓮房に身を寄することとなつた。

然るに逸早く蓮長の在所を探し當てた此地の地頭は、今に危害を加へむものと、表面には如何にも畢敬するものの如く装ひ、

『このごろ蓮華寺の傍に、阿彌陀堂を建立したれば、何卒御堂供養の導師となつて給へ』

と申入れた。蓮長は直に其心事を看破したが、聊か動する心も見せず、

『何より易いことでござる。さらば之より罷り起さむ。いざ案内せられいと、如何にも平氣に答へたのであつた。

聽て蓮華寺に到ると、聽衆は早くも堂に満ちて、また立錫の餘地もなかつた。蓮長は徐ろに阿彌陀堂の前に進み出で、

『諸の會衆聽かしやれ、天に二日なく、地に二王なきが如く、佛界亦二佛あるいはれはござらぬ。十方佛土には、唯釋迦牟尼佛が在しますばかり、末法萬年には、唯法華經あるのみで、他宗の存在を認めぬのちや。然るに方便の權教を信じ、無縁の阿彌陀佛に歸依し、正法の法華經を蔑視して、有縁の釋尊に背いたならば、必ずや無間地獄、阿鼻大城に墮つるでござらう』
と、慨然阿彌陀如來を論駁し、滔々法華經の妙理を説いたので、聽衆は乍ら憤慨し、

『阿彌陀堂の開堂供養に、本尊を嘲る狂人。賣僧奴。それ引きおろせ。舌を
殺げ』

と、聲々に罵り叫むで、蓮長の身を取り圍むだ。

かくして危機は復た將に蓮長の首に落ち來らむとす。

一八 日蓮の改名

日蓮の感慨如何

會衆の立ち騒ぐ隙を覘つて、辛くも堂外に通れ出た蓮長は、再び青蓮房に立
ち歸る譯にもゆかぬので、足の向ふに任せて、野を越え、山を越えて、上總の
笠森なる觀音堂に辿りついた。

故郷の追放、領主の迫害——開教の第一日から、危機の上に立つた蓮長の感

慨果してどんなであつたであらう？

袖にそふ涙の雨にぬれじとて

けふ笠森をたづね來にけり。

この歌の主蓮長は、二十三年の後、當時を追懐して、左の如き書簡を、折伏の
旗揚地であつた清澄山の人々に送つた。願くば法華經の行者日蓮の男々しき覺
悟を其文に見む。

『一切經を見候ひしかば、八宗並に一切經の勝劣、粗是を知りぬ。其上、眞
言宗は法華宗を失ふ宗也。是が大事なれば、先づ序分に禪宗と念佛宗の僻見
を責めて見んと思ふ。(略) 惡眞言、鎌倉に來りて、又日本國を亡さんとす。
其上、禪宗、淨土宗など申すは、又云ふばかりなき僻見の者也。此を申さ
ば、必ず日蓮が命を斷つべしと存知せしかども、虚空堂菩薩の御恩を報せん

が爲に、建長五年四月廿八日、安房國東條郡、清澄寺、道善の房の持佛堂の南面にして、淨圓坊と申す者、並に少々の大衆にこれを申しはじめて、其後二十餘年が間、退轉なく申す。

又其前後の書狀中には、

「此恩を報せんが爲に、清澄山に於て佛法を弘め、道善房を導き奉らんと欲す。」

「日本國に此を知れる者、但日蓮一人なり。これを一言も申し出だすならば、父母、兄弟、師匠、國主の王難、必ず來るべし。いはすば、慈悲なきに似たり」

『日蓮世を恐れて、之を言はずば、佛敵とならむか』

齋藤一家の改宗

その翌くる日のことであつた。當國茂原の領主齋藤遠江守兼綱は、郷士高橋五郎時光と共に、觀音堂に蓮長を訪ね、直に用意の鞍置馬に乗せて、茂原の館につれ歸り、いと鄭重に款待し、其説法を聞いて痛く感動し、一家一門悉く妙宗の信徒となり、兼綱は受戒して、直に妙光寺を建立した。

然るに蓮長は、今我日本に蔓れる諸宗の信徒を説伏するには、まづ立宗の根本を覆すを以て捷徑なりとし、一七日の説法を訖るや、茂原を辭して、法幢を鎌倉に立てむとし、一先づ故里の小湊に歸つた。

兩親も亦歸依す

清澄山の説法で、一山會衆の憤怒を買ひ、直に追放の身となつた我子の蓮長を迎へた時、重忠夫婦は事の意外なるに茫然自失の體であつた。聽て蓮長は言葉を改め、其後の成行を具さに物語り、

「上總茂原では、領主を首め、一家一門悉く歸依された。この上は鎌倉に罷越し、花々しく三類の法敵を撃破して、愈諸宗説伏、開宗の旗揚げを致す所存」

と、いと嚴かに決心の程を語れば、重忠もかねて我子の天分を深く信じて居たので、

「我等も次第に老ひ行く身の上、今別れなば、又何時會ふとも測られぬ此命。さりながら御身は、畏くも釋迦世尊の御使。妙宗弘通の爲に生れ來たものなれば、今さら引き留めも致すまい。疾く疾く行いて、法華經の爲に盡すが可

い。我等も未來の佛縁を結ぶ爲、今までの宗旨を改め、我子ながらも、今は御身を我師と仰いで、法華經に歸依致すであらう」

と言ひ放てば、母梅菊も、日天子の靈夢、白蓮華の奇瑞など想ひ起して、今は深く心に誓ひ、夫と共に我子を拜すれば、

「さても忝じけない其仰せ。萬人の信徒を得たより、尙ほ嬉しう存じます。蓮長が新宗開宜の首途に、何より難有きこの餞別。さらば之より授戒の式を擧げませう」

と、蓮長は限りない法悦に感謝するのであつた。

聽て重忠夫妻は、我子の大徳によりて、成佛精進の種を得たるを喜び、父は永劫の紀念として、妙法の妙の一字と日輪の夢の奇瑞とに因むで、法號を妙日とし、母は妙蓮と名のることとなつた。

蓮長は莞爾として微笑ながら、

『御両親の得脱は、衆生教化の第一歩。殊に美しい法號は、暗に經義に適ふて居ります。さらば蓮長も、両親の御名を取つて、之より日蓮と稱へまする』

かくて法華經の行者日蓮は、その鮮かなる新旗幟を、愈佛天に翻へすに至つた。日蓮は後年其名を説いて、

『明なること日月に過ぎむや。淨きこと蓮華にまさるべきや。法華經は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華と名く。日蓮又日月の如くなり』
と云ひ、又神力品に、

『日月の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人間に行じて、能く衆生の闇を除く』

とある。『斯の人』を以て自から任じて居た。

いよく鎌倉に出づ

時は建長五年風薫る五月の中浣。暇を妙宗第一の受戒者たる其両親に告げて、小湊を後に、安房の西海岸へ出で、海路から相州三浦三崎に渡ることとなつた。此日風強く波荒れて、到底渡り得べき見込がないので、日蓮も少からず當惑しながら、渚に佇むで居ると、和泉澤三郎と言ふ者が差蒐つて、日蓮の風丰、如何にも世の俗僧と異なるを見、之を問ふて、法華教の一宗を開いた日蓮上人その人なることが分つたので、直に伴ふて家に歸り、

『茅家なれど、御足を留めて、船出する日をお待ちなされ』
と、一家擧つて之を尊崇し、何くれとなく款待すので、蓮長も大に感謝し、心

をこめて法華教の奥義を説き、和泉澤一家を擧げて、悉く之を導化した。

風は尙ほ歇まなかつた。仍で日蓮は一日後の山頂に立つて、怒濤澎湃たる海原を望みながら、朗かに經文を誦すると、今まで逆捲いて居た波風も、ヒタと歇むたので、日蓮は海路安かに深田の浦なる米ヶ濱についた。日蓮は漁夫の背をかりて海岸に上り、陸路を杜戸の崎に取つて、守殿明神に詣で、愈鎌倉について、松葉ヶ谷に、落居の場たる草庵を結ぶこととなつた。

鎌倉當時の形勢

鎌倉は過去十三年の間に、多少の變遷を見せて居た。北條家の暴虐は益甚だしく、前將軍頼朝は、北條討滅の陰謀露顯して、將軍を退けられ、さらに六才の頼繼を將軍としたが、經時卒するに及むで、その弟時頼代つて執權とな

り、次で幼將軍頼繼を廢し、後嵯峨天皇の第一の皇子宗尊親王を迎へて、征夷大將軍と仰ぎ、表面小康を保つて居たが、裏面の暗流は益急にして、人心は極めて不安の状態に在つた。

ここに當時の鎌倉では、幕府の後援によりて、念佛、禪の二宗は、益その勢力を得、上下を擧げて之に歸依するの有様であつたから、この間に立つて、徒手空拳、一宗の開立を圖るは、寔に至難中の至難事であつた。

さりながら、一たび松葉ヶ谷の地を相して、一字の草堂を結むた日蓮は、一切の不自由を露厭はず、之を以て、七堂伽藍にも勝る本化妙宗の道場と思ひ定め、朝夕この中に在つて題目を唱へ、外に出で、社頭街上處を擇ばず、人さへ居れば、乍ち題目を高唱して、「法華教のみが眞の佛教である所以」を説き、あはせて諸宗の迷ひを破析するので、面白がつて聞く者もあれば、中には

また我宗旨を罵られて憤る者もあり、噂は忽ち町から町、村から村へと傳つた。

「さても不思議な法師もあるものぢや。聖僧か、狂僧か、如何にも不思議の坊さんだ」

と云ふ風説は、さらに風説を生むで、竟にその盡くる所を知らなかつた。

一九 日昭歸伏す

蟲の音も細つて、萩の上風身に泌む秋の夕暮であつた。日蓮はこの日も鶴ヶ岡の經藏から歸つて、静かに讀經して居ると、年頃三十二三とも見える氣高い法師が、飄然として其庵を訪づれた。

法師は恭しく三拜の禮を行ひ、

「愚僧は、叡山の成辨と申す淺學寡聞の一沙門。多年叡山に在學し、慈覺大師は教旨を稽え見るに、大師は傳教大師の法弟でありながら、彼此其法理を異にせるを以て、畢竟法敵だと信じ、不審の餘り、學頭に質せば、御坊は蓮長の弟子ではない乎」と、苦り切つての御返答。さりとは甚だ合點の行かぬことと故、その蓮長法師とは、如何なる人かと問ひ返した所、其は房州から來て、多年當山に在學したもので、慈覺大師を法敵だと罵るから、そは傳教を知つて、未だ慈覺を知らぬからだ、幾ら論しても如何な聞き入れず。そのまゝ山を下つたのぢや。御坊の問は、よく其蓮長に似て居ると申され、其後の消息を無動寺の尊海と申さるゝ法師に尋ねたるに、「蓮長は一代の偉傑。先に故郷に歸つたが、今は日蓮と名を改めて、鎌倉に居住せらるゝ由説き示され、さては其人に就て、胸中の疑惑を釋かむと思ひ決め、早速叡山を下つて、當地

に罷越したる次第。此上は何卒御坊の法弟として、化導に與り申したい」と。具さに語るを聞いて、日蓮も膝を進め、

「かくも同じ志を懐ける人と相見ゆるは、何より喜ばしきことでござる。愚僧は固より若年ながら、宗門に於て一日の長あれば、愚僧が修めたる教理を説き明し申すでござらう。では暫らく足をこの草庵に留められい」

日蓮は其後寢食を忘れて、或は經文を引證し、或は之を宗疏に照し、いと懇ろに成辨が疑問を説き論したから、幾何もなくして、本化妙宗の正義を會得し、最早叡山に歸る心もあらず。自から進むで其法弟たむことを乞ふので、日蓮も亦この篤學の法弟を得て、百萬の援軍を得たよりも心強しと打ち喜び、建長六年閏正月吉日を以て、本門の大戒を授け、名も辨阿闍利日昭と命じたのであつた。

二〇 法敵征討の門出

妙宗の爲に、鮮かな新旗幟を佛天に翻して、一大法戦を開くべく、靜かに鋭氣を養つて居た中、早くも一年は過ぎ去つた。ある日日蓮は、勸持品を讀み了ると、日昭を側近く召し、容を改めて、諄々と次のやうなことを説き出した。

我等上行所傳の妙法を取つて、末法萬年に弘むる上は、釋尊の勸持品にもある如く、三類の法敵現はれて、有らゆる迫害が必ず來るに相違ない。無智の大衆は、罵詈、讒謗、排擠、構陷を敢てし、執政は遠流、壓迫、追放の限りを盡くすであらう。死は固より恐るゝ所ではないが、其儘何時までも打捨て置いては、國土の亂るゝこと、火を睹るよりも明かぢや。しかし之が爲に、空しく身命を殞すやうなことでもあらば、我が亡き後、誰か義旗を翻して、

權門諸宗を折伏し、以て本化妙宗の弘通を圖り、以て十方佛土の衆生を濟度するであらう乎。思ふて是に至れば、自から決心も搖いで、躊躇することも無いでは無かつたが、さりながら今は、御身の如き力強き味方を得て、後顧の憂は全く失せた。縱令日蓮は死すとも、法華經は滅びない。いざ此上は、御坊この道場を守り、法統を繼がれよ。日蓮は進むで法敵と戦ひ、身を以て法門に殉しなければならぬ。今より敵と戦ひを挑むで、日蓮の身は如何になるとも、吳々も我が死したる後は、我が志を繼ぎ給ひて、有縁の味方を集め、續いて法敵に當らせられい。必ず必ず我と共に死せむなどは思召さるな。討死するも、又後の圖をなすも、釋尊に對する忠義は忠義。このこと堅く頼み置く。』

肺肝を絞つて出づる一言一句に、凜然たる其意氣は溢れて居た。

日昭はいたく此遺訓に感激し、熱き涙に咽むで居たが、やがて決心の臍を固め、恭しく師の前に拜伏し、

「數ならぬ此身を、左程までに思はるゝかと思へば、何より嬉しうござりまする。私として申さば、死生を共にしたい所存にござりますれど、この大業は、宗門の公事でござれば、師は師の志を遂げさせ給へ。日昭も法の爲には、粉身碎骨、師の君の命じ給ふ所、決して違背仕らぬ。何卒心安う思召されう』

と誓へば、日蓮は深く打喜び、

『その言葉を承つて、さらに思ひ残すことはない』
と、大に心を安じ、此上は死命を賭して法敵を撃破し、國諫を進めやうと、今や猛然として愈々奮ひ起つた。

かくて日蓮は、開宗宣言の吉辰たる四月二十八日を卜して、天照皇大神、及三十番神を名越松ヶ谷の草堂に勧請し奉り、一心不亂に讀誦し、最後に自ら「南無妙法蓮華經」と大書して、法樂に供へ、之より愈々衆生に弘布せむとて、蹶然松葉ヶ谷の草堂を立ち出づるのであつた。

附言。日昭は下總國葛飾郡平賀の郷士、平賀祐昭の子で、承久三年の生れだから、日蓮より一歳の兄であつた。そこで日蓮は、我法弟ではあるが、其名を呼ぶにも、常に敬意を拂つて、辨殿と言つて居つたと。

二二 街頭の説法

行者の意氣軒昂

後事を日昭に託したので、今は思ひ残す所もなく、素朴ながらも、白衣の上

に緇衣を纏ひ、威容を正して、辻町の東、小町の街頭に立つた。

往來は人馬織るが如く、頗る殷賑を極めて居るが、日蓮はいと嚴かに、

「諸の大衆よく聽かれい。我は法華經の行者日蓮と申す者、今我妙宗に順ふ者も、背く者も、皆齊しく救はるゝであらう。されば順縁、逆縁、悉く我妙化を受けられい。皆の衆は何れの宗旨に頼り、何れの經文を奉ずると仰つしやるのぢやや?。十方佛土は、唯一乘。末法萬年は唯一經で、他に何ものも存せぬ。大祖釋迦世尊には、四十餘年『未顯眞實』を宣はせられたのであるから、爾前の諸經は、殆ど一つの方便であり、權教であるものばかり、方便は暫用還廢で、暫く用ゐて還た廢れたる。正直に方便を捨て、無上の道を説くとは、釋尊の宣はす所の、その無上の道こそ、末法萬年に施すべき唯實無權の法華經でござる。」

「諸子の宗旨と經文とは、これ悉く權門方便に外ならぬ。今釋尊の捨て給ふた權門と、方便とに従つて、如何にして得道成佛せらるるのちや。寔に木に縁つて魚を求むるが如く、笑ふべきことござる。」

「今や諸子の歸依すべき眞理正道は、唯この法華經に求めねばならぬ。之を外にしては、佛教もなく、經文もない。されば速かに、他の宗旨を廢し、他の經文を捨てられい。」

「弘法も、慈覺も、法然も、將榮西も、悉く謗法の徒ではござらぬ乎。」

念佛無間、禪天魔。

眞言亡國、律國賊。

「妙宗以外の宗門に歸し、かつ其經文を奉ずる者は、今にも無間地獄、阿鼻大城に墮つるであらう」

論難攻撃、且つ説き且つ論じ去るさま、譬へば獅子吼のそれにも異ならず。

立ち集ふ僧侶は固より、男女の大衆は、何れも年來信する宗門を罵られ、さては無間地獄と喝破せられて、憤慨に堪えず。顔面朱を蹴いで、其身邊に詰め寄せつゝ、

「賣僧奴。殺せ。ソレ投げろ」

「阿彌陀如來の嚴罰を思ひ知れ」

かく呼はりながら、急霰の如く、石や瓦を抛ち、動搖く群衆の中に、尙且つ泰然自若として、愈々聲を厲ましつゝ、珠數をひねつて、

「念佛無間、禪天魔。」

「眞言亡國、律國賊。」

末法萬年の今の世に、妙宗の外、衆生濟度の正法はござらぬ。我を罵る者は

罵れ。石を抛つ者は抛つがよい。逆縁順縁の分ちなく、必ず法華の妙益に與かるであらう』

と、經文に照し、宗疏に徴し、滔々熱火の辯を揮つて法理を説くこと、宛然大河の決するが如く、いよ／＼立ち騒ぐ群衆の前に、堂々法戰の歩武を進むるのであつた。

瓦石は雨下して、哀れ日蓮の額から流るゝ血潮に、法衣は日に日に染つた。折伏は、妙宗弘通の唯一手段であるから、如何なる迫害、反抗、讒謗をも恐れず、辻説法は幾日もつづいた。そして「眞珠は貝の中、信者は敵の中」に在るべきを思つて、瓦石雨下の間に、泰然として、邪宗の論破に力めて休まない日蓮の法戰は、如此くにして、日毎日毎に益々猛烈になり行いた。従つて、『妖僧か、狂僧か。さても憎らしい法師ではある。』

と、憤怒の餘り、眼を怒らし、齒を切つて、罵る聲も亦一日も絶えなかつた。或日一人の老僧は、見るに見かねて、日蓮の前に進み、半ば宥め、半ば嘲ける口吻で、

『か程瓦石の雨を浴びながら、言はいでも可い辻説法をするなんて、何の修行の道でもござるまい。サ、早く歸らしやい』

と聞くより、日蓮は莞爾と微笑み、
『末法五濁の今の世の、一切衆生に正法を弘布する日蓮が、法敵の刀杖を受くることは、かねて覺悟の前でござる』
と説き放つた。

四條賴基歸依す

此時編笠眼深に冠つた一人の武士、つと現はれ、

「御坊の説法は、正しく釋尊の説かせ給ふた御經でありながら、念佛、眞言、禪、律諸宗の依教は、權教方便に過ぎぬから、法華教を信せよと仰せらるゝは、チト腑に落ちかねる所でござる。抑も如何なる仔細あつて、彼を蔑如し、此を讀へ、殊に桑門の身でありながら、上より許し置かるゝ教に、依估の裁判を下さるゝとは、如何にも不審に存じまする」

と質すより、日蓮は心得顔に、

「釋尊の正意は、法華經にござる。法華教は、釋尊の建て給ふた大寶塔で、爾前四十餘年の諸經は、此大寶塔を建つるまでの足場たるに過ぎぬ。故に建て上げられた今となつては、用のないもの。されば釋尊も、爾前の諸經は、正直方便と説かせ給ひ、爾後に始めて無上の道を説くと仰せられた。然るに衆

俗は、法の善惡、教の曲直を辨へず。此法華經を打ち捨て、爾前の諸教を信するは、全く寶塔を捨て、足場を拜むも同様でござる。そこで一切の衆生に、佛法の偏圓、是非を説き諭して、釋尊の正道に化導するのが、我等の本務でござる」

と説く所も理義明瞭を極め、聊か偏する所もないから、武士も暫時は黙して沈思するのであつた。

聽て武士は、釋然として悟れるものゝ如く、日蓮を拜しながら、

「上人の御言葉道理至極に存じます。某は北條家の一門、江馬遠江守光時の老臣、四條左衛門尉頼基と申す者。此程建長寺に參禪して居たのでござる。が、不圖上人の御説法を承り、半信半疑で、自から釋く由もなかつたので、今日態々參上した次第。只今御説を拜聽して、日頃の疑問全く晴れたから、

之より改めて、法華教に歸依するでござらう』

と甚く感謝しながら、恭しく立ち去つた。かくて身に、生疵の絶え間なきに拘らず、尙且猛然として法戦をつとくる日蓮の熱誠に動かされ、妙宗に歸依する者、日毎に増して行つた。

辻説法の喊聲は、鎌倉の天地に響き渡つた。北條家の殿中は固より、極樂、建長、其他の寺や、高僧の耳にも傳つた。そして法敵の心は、次第に動搖きの度を増すのであつた。

一一一 歸依者愈多し

進士太郎善春歸伏

六月のある夕、例の如く説法を了へて、松葉谷の草庵に歸らむとすると、一

天俄にかきくもりて、夕立さへ沛然とふり出でた。慌てふためく男女の群、遁げ惑ふ子供の叫び、日蓮も法衣の袖をかざしながら、今にも走せ出さうとする途端、一人の年若き武士に呼びかけられ、慫慂らるゝまゝ、謝して其傘下に雨を避けた。

武士は此法師が、日蓮その人であつたのに深く驚いて、それからそれへと、種々の疑を質しかつた。執權北條殿の歸依淺からざる禪宗を、天魔だと罵つたことに就て、仔細を聞かれた時。日蓮はいと物靜かに、

「禪は教外別傳不立文字と云ひ、經文によつて觀を修めず、専ら坐禪によつて、頓悟すべしと説かれてある。然るに釋尊は、佛教によらずして、成佛得脱すべしと言ふ者は、天魔の眷族だと宣はせ給ふたのだから、經文を度外視する禪宗は、天魔と申したのちや。我は唯佛使たるの使命を果せるのみ」

歸依者愈多し

と説き諭した。

武士は大に共鳴する所があつて、「某は北條氏の近臣、進士太郎善春と申す者。明日更めて高教を請ひ奉らむ」と誓ひつゝ、日蓮を其草庵まで送り届け、其翌日約の如く草庵を訪ふて、妙宗に歸伏し、只管その化導を受くるのであつた。

日朗の入門

晩秋のある朝。不思議にも一天俄に黒雲に閉ざされ、雷電霹靂頓かに到つて、峯巒忽ち崩れむとする折しも電火一閃、草庵の庇を貫くと同時に、一天忽ち晴朗に復つたと見て、覺むればこれ曉の夢であつた。

其朝一人の武士が、一少年を連れて草庵を訪れた。それは下總國猿島郡能手の住人、印東治部右衛門直國とて、日昭の姉婿に當る人だと判つた。直國は先

頃、深く日蓮上人の説法に感動し、其子吉祥丸を上人の法弟となさんとして、態出府したのであつた。

日蓮は其奇特な志を聞いて、いたく打喜び、曉の夢を思ひ合せつゝ、これも何かの因縁ぞと、快く承諾して、篤と教養することゝなつた。吉祥丸は、まだ、十歳前後の幼童ではあつたが、温順の中に英氣を帯びて居たのと、「雲晴天朗かになつた」夢に因むで、日朗と命名すれば、父直國も大に悦び、天晴れ其名に耻ぢざれと、懇ろに説き諭して、立ち歸つた。

天性明敏穎悟なる日朗の學才は、忽ちにして驚くばかりの進境を示したので、日蓮は固より叔父なる日昭の喜びは、又一入深かつた。

船中の法話

歸依者愈多し

谿流の河に向つて走るが如く、日蓮の法門に歸依する者、日毎日毎に殖へ、日蓮が弘布の力は、日に益々大を加ふるのであつた。

さて日蓮の母梅菊の縁者に、下總國葛飾郡八幡の郷若宮に、富木播磨守胤繼といふ者があつた。家には多くの産を有し、一族亦多くして、其勢近郷まで及むで居たのであるが、常に日蓮の父重忠の不遇を憫み、何時か赦免を請はむと思ふ中、其子善日磨の出家を聞いたから、其子を助けて、天晴の高僧となさんとし、南都北嶺二十有餘年の學資は、絶えず父に代つて之を送つた。

日蓮はその今日あるのも、畢竟富木殿のお蔭だと、深く其恩義を肝銘し、何時かは若宮に赴いて、多年の恩を謝せむと思つて居たから、この年十一月やつと暇を得て、旅装もそこそこに、鎌倉を立ち出で、間もなく若宮の里に辿りついた。

若宮の館を尋ねると、殿は鎌倉參勤の爲、先程發足いたされ、今ごろは、二子が濱を船出せらるゝであらうと聞くより、日蓮は海岸へ走せ向ひ、既に一反ばかり漕ぎ出でた大船を呼びとめて、其船の人となつた。

かくて日蓮は、洞の間なる胤繼が前に兩手を突いて、懇懃に一禮し、久潤を叙して、其後の消息を物語れば、胤繼は赫と憤りの目を瞪りながら、

「松葉が谷の狂僧とは、さても汝のことなる乎。我が汝を扶助したのも、全く汝を天晴れの名僧となさむばかりであつたのに、汝が此頃の振舞ひは何事ぞ、殊に我が信仰する慈覺大師を罵る悪魔日蓮。一殺多生の慈悲により、汝の細首は立ちどころに討ち取りくれる」

と、刀の柄に手をかけながら、威丈け高になつて詰めよせれば、
「佛門に捧げたこの命。聊か惜しくは御座らぬが、そもく慈覺大師は、傳教

大師の法弟でありながら、彼此宗法を異にし、分けて我日本は、神祖を日の御神と仰ぎ奉る國なるに、日を射落せし夢を見て、佛意に叶ふと判断したるは、正しく天魔破句の所業と申すもの。念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊。かく申す日蓮は、佛祖の御使。それでも殿には釋尊よりも、慈覺大師を拜し給ふか』

と、泰然として説き諭す日蓮の法話に、胤繼の面は次第に和らぎ、さては多年の迷夢全く覺めて、我も今より法宗に歸依せん。と真言の珠數をバラリと断ち切つて、日蓮の前に其志を誓ふのであつた。

さりながら、三類の法敵は、益々蔓つて、未だ之を芟くに由なかつた。されは下總から歸つた日蓮は、其後も屢々雨下する瓦石の中に立つて、或は説法し、

或は辯駁して、盛に其教を傳へて居た。

かくて俗衆の増上慢は既に起り、今は道門増上慢も來り、さらに僭聖増上慢も來やうとし殊に日蓮の熾烈なる法戦によつて、心の動搖を感じつゝ、妙宗に歸伏せむとする者、日に益々多きを加ふるので、鎌倉の所謂名僧智識の中には、内心少からず修羅の焰を燃す者もあつた。この形勢を見て、日蓮は、妙宗の弘通を圖るは此時に在りとし、説法に著述に、あらゆる限りの精力を注いで、法敵の論破に力め、日昭はこの間にありて、只管法域の開拓を行ひ、所謂開立の祖師と、守成の法弟とは、互に相扶けて、宗法の廣宣流布を圖つたので、新宗の勢力は、宛然旭の昇るが如く、忽ちにして一方に覇を稱ふるに至つた。

二三 日蓮の孝養 (父妙日の死)

かくて四年の春秋は、隙駒の如く過ぎ去つて、早くも正嘉元年を迎ふることとなり、法門は益外護の力を加へて、愈般賑を極むるやうになつた頃。何事ぞ房州の訃音は、突如として、松葉が谷の日蓮を驚かした。それは外でもない父妙日他界の報であつた。

悲報に接して悶絶した至孝至誠の日蓮は、四日の朝に至つて、漸く我に復り、いざ之より我故里に歸らむと、自から旅装を整へるので、日昭日朗を首め、一坐の人々うち驚き、父子の情はさることながら、今は宗門の一大危機。暫らく思ひ止まり給へど、涙を揮つて止むるを、日蓮は滂沱たる涙を法衣の袖に拂ひつゝ、いと虔しやかに、

『孝は百行の基と、佛も説かせられてある。我もし之を忽にせば、佛の道に戻るは言ふまでもなく、儒教にせよ、佛門にせよ、孝道の意義に異りはない。』

いざ之より故郷に立ち歸るであらう。後事は特に日昭殿に頼み置く。』
と、更に一坐の會衆に向つて、『今より後は辨殿を我と思ひ、必ず其化導に背かぬやう』にとて、懇ろに説き諭し、一同は感激の涙に咽びつゝ、師の故舊に歸るのを送るのであつた。

嗚呼斷腸の極。悲痛の極。房總の海は舊に依りて青く、清澄の山は依然として緑なるも、一たび逝いて歸らぬ父の遺骸に取り絶つた時。孝心人より深かりし大聖日蓮の心はどうであつたか。緇衣の身の尙しかすがに、はふり落つる涙の雨に暫時は言葉もなかつた。

かくて、涙ながらに野邊の葬りを済した日蓮は、墓畔に小さやかな草庵を結むで、喪を修すること茲に一百日。只管母を慰めて、看經供養の暇には、靜かに筆を執りつゝ、かつは亡き父の菩提に供へ、かつは教の爲に、一日も其勞を

休まなかつた。

二四 天變地異

時は正嘉元年二月二十三日、突如として地大に震ひ、連日連夜激動して少しも歇なかつた。かくて四月から五月にかけては、日蝕月蝕の變あり。六月には雨一滴も降らなかつた爲、大地は乾いて草木は悉く枯死した。そこで加賀法印は、幕府の命によつて、雨乞ひの法を修し、鶴岡の別當隆辨も同じく祈禱を行ふたが、さらに其甲斐もなく、七月には大地龜裂を生じ。八月一日戌の刻には、大地震動、地下激しく鳴動し、山岳崩れ、人家潰れて、人畜の死傷算なく而も大地の裂目よりは、青き火焰を噴出して、震動は九月に入つても尙ほ歇まなかつたが、十月十三日には、五色の雲俄かに天を蔽ひ、驚破天變と思ふ間も

なく、紫電八方に飛び、見る／＼雷電天地に轟いて、襖障子を吹き倒し、十五日にも復た大激震起つて、關東二十八個國は、頻りに到る天變地異の爲に、人心恟々、安き心もなかつた間に、早くも正嘉二年を迎ふることとなつた。しかるに此年も亦颶風起り、洪水氾濫し、惡星現はれ、山岳の鳴動甚しく、或は疫癘流行し、剩へ打ち續く凶作の爲、百姓饑餓に瀕して、屍を山野に曝す者數知れず。諸宗の法師は、慘憺たる其光景に驚き、頻りに法を行つたが、驗は少しも見えなかつた。

日蓮はこの天變地異を見、これ畢竟、緇素道俗が法華經を誹謗し、その廣宣流布を妨げるので、かゝる兇變も起るのだ。宜しく先邪宗を斥けて、衆生の災禍を除くべしと、直に北條執權に迫つて、國諫を進めむと思ひ定めた。

是に於て日蓮は、駿州岩本なる天台宗の巨刹實相寺に赴き、智證大師が唐よ

り携へ歸つた一切經を閲して、愈國宗諫曉の準備をなすこととなつた。(時に正元元年春三月)實相寺の學頭智海法印は早くも、日蓮上人が世の噂と違ひ、道徳極めて高うして、學識の該博なる千古の名僧なるを看取し、篤く之を禮し、給仕として伯耆坊と云へる所化をつけて、其便宜を圖らすることとした。

日蓮は經藏に入つて、日毎に經卷を繙き、或は智海に請はるゝまゝ、天台大師の摩訶止觀を一山會衆の前に講じ、少からず感動を與へたが、中にも伯耆坊の如きは、當時僅かに十四歳の所化に過ぎなかつたが、深く日蓮の徳を慕ひ、之に仕ふること極めて篤かつたので、智海法印も私かに思ふ所あり。其將來の爲に、日蓮上人の法弟となつて、一佛乘を學ぶがよからうと懇ろに説き勸むることともあつた。

かくて數月の間に、讀むべき經文は、悉く之を讀了したので、この上は鎌倉に還つて、愈國諫の準備をなさむとて、山を下り沼津に到る頃、後より息せききつて馳せ來る年若き所化があつた。日蓮は後を顧みて、その伯耆坊なるを知り、その故を尋ねれば、坊は「折角上人の御跡を慕つて此處まで參つた某。何卒上人の御弟子となさせ給へ」と、切りに其旨を乞ひ、而も學頭の勸めもあつたと云ふので、相携へて鎌倉に歸つた。

二五 窟裡の大著述

天變地異は尙ほ歇まなかつた。疫癘——早魃——饑饉——其他あらゆる災厄は、益甚しうして、殘虐なる魔の手は、飽くまで人間の運命を翻弄せむとするやうであつた。

是に於てか日蓮は、國宗諫曉を斷行するの益急務なるを感じ、一切の俗塵

を絶ちて、松葉谷の巖窟裡にひきこもり、多年の蘊蓄を傾倒し、熱烈燒くが如き信仰を以て、一心不亂に其筆を揮ひ、漸く成つたのが、かの所謂『立正安國論』なるものであつた。

やがて日蓮は、當時鎌倉の侍講を勤めて居つた比企三郎能本を訪ね、

『近年凶變の相踵いて起るのは、これ全く衆生が法華教を誹謗するの罪に外ならぬ。日蓮王臣として、如此き國家の大事を看過するに忍びず。自から書を裁して公邊に致し、如何にもして、國家の厄災を除かむ所存でござる。さればまづ御邊御一讀の上、何卒執權職に進め奉るやう、御取計らひ被下れい』と云つた。能本は恭しく推戴きて、暫時黙讀した上、數個所の質疑を試み、一々詳細なる説明を聞くに及び、法理徹底せる此一篇の高論に頗る驚歎し、辭を改めて、有髮の法弟たらむことを誓ひ、この堂々たる國諫は、社寺職の手を

經て差出さるゝ方可然き旨を告げ、尙ほ暫らく秘密にせられたいと云つた。そこで日蓮も大に首肯き、文章の瑕疵は、宜しく斧正せられたしと囑せらるゝま、能本も二三個所に筆を加へて、返してやつた。やがて能本は、受戒して法號を日學と稱へ、其母も亦本門に歸依して、妙本と名のることとなつた。

時は炎熱尙ほ堪へ難き文應元年七月十六日、日蓮は既に淨寫せる安國論を携へて、長谷大佛の傍なる社寺職宿屋左衛門光則を訪ねて、其執達を乞ふた。光則は翌日出仕して、其趣きを執權時頼の前に訴へ出で、『安國論』の一覽を求めたか、兎も角御前に披露せむとて、侍講比企三郎能本と共に將軍宗尊親王の御前に進み出で、北條氏の一門は固より、大小の諸侯肅然として居並ぶ中で、能本は威容度しやかに、『安國論』を讀み始めた。

『旅客來り歎じて曰く。近年より近日に至るまで、天變地天、饑饉疫癘、偏く

天下に満ち、廣く地上に迷る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充つ。死を招くの輩、既に大半を越え、之れを悲まざるの族敢て一人もなし。然る間、或は劔利即是の文を專にして、西土教士の名を唱へ、或は衆病悉除の願を待みて、東方如來の經を誦し、或は病即消滅、不老不死の詞を仰ぎて、法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅、七福即生の句を信じて、百座百講の儀を調へ、或は秘密眞言の教によりて、五瓶の水を灑ぎ、或は坐禪入定の儀を全うして、空觀の月を澄まし、若くは七鬼神の號を書して、千門に押し、若くは五大方の形を圖して、萬戸に懸け、若くは天神地祇を拜して、四角四境の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀みて、國主國宰の徳政を行ふ。然りと雖も、唯肝膽を摧くのみにて、彌々飢疫に逼り、乞客目に溢れ、死人眼に滿つ。屍を臥せて觀と爲し、戸を並べて橋と作す。夫れ願れば、二離碧を合せ、五緯珠を連ね。

三寶世に在し、百王未窮まらざるに、此世早く哀へ、其法何ぞ廢れたる。是れ何なる禍に依り、是れ何なる誤に由るや。と。

「主人の曰く。獨り此事を愁へて、胸臆に憤悲せしに、客來りて共に歎く。屢屢談話を致さん。夫れ出家して道に入る者は、法に依て佛を期する也。而るに今、神術も協はず。佛威も驗なし。具に當世の體を見るに、愚にして後生の疑を發す。然らば、則ち圓覆を仰いで恨を呑み、方載に俯して慮を深うす。情々微管を傾け、聊か經文を披くに、世皆正に背き、人悉く惡に歸す。故に善神は國を捨て、相去り、聖人は所を辭して還らず。是を以て魔來り、災起り、難起る。言はずむばある可からず。恐れずむばある可からず(下略)

まづ當時の慘害と、恐慌の事實とを叙し、筆鋒鋭く邪宗を論破して、更に厄災の原因を妙宗謗法の致す所なりと斷言し、かつ宗教の正道と、國家の安寧との

關係最も緊密なる所以を喝破して、衆生の速かに正法に歸せざる可からざる理由を明かにし、而してこれ「日蓮が私言にあらず。釋尊金口の佛説なり」と論斷した。仍で一坐の者は、唯々驚きの目を瞳つて、互に顔と顔とを見合せるのみであつたが、分けて篤く禪を信せる北條一家は日蓮が禪を以て、天魔の業なりと喝破せる其斷案を憤慨し、時頼以下悉く佛然として其席を立ち去つた。かくて二十四日。時頼入道は、日蓮を執權屋敷に呼び出して、自から之に對面し、

「出家沙門の身でありながら、書を著して天下の政治を私議し、萬人の信心を惑はすは、重々不屈の振舞ひである」

と、日蓮を睨みながら大喝したので、一坐の面々は、色を失して縮み上つたが、日蓮は平然として、

「天下の安危は、一に佛法の正邪に關るものである。されば之を言上するは、出家沙門當然の道で、決して不屈の振舞ひではござらぬ。そもく法華經は、正法中の正法、諸經中王、最爲第一である。然るに各宗の僧侶は、權實を分たずして、法華經を蔑視し、邪宗を以て衆生を化導せむとて、却つて衆生をして、無間地獄の苦みを受けしめむとして居る。仰ぎ願くば一日も速に、各宗の權教を禁じ、何卒一乘教に歸依せられよ。若し執權職にして、一たび妙宗に歸依せられむか、國家安穩、四海靜謐に歸すること、譬へば鏡にかけて見るやうでござる。」

と、諄々として説き諭せば、時頼は大に氣を焦ち、

「何れの宗門も、均しくこれ同じ佛敎である。其方一人で、三國傳來の諸宗を何うして破ることが出來やうぞ」

と。捨白を殘して立ち去つた。日蓮はその立ち去らむとするを見るや、聲を厲まして、

『さても心ないことでござる。此儀お用のなくば、自界叛亂、他國侵逼の國難必ず相踵いで起るでござらう。其時に迨むで、臍を嚙むも、はや及ばぬこととでござらうぞ』

と。蹶然として立ち還るその豪膽なる振舞と、森嚴犯すべからざるその威容とを仰ぎ見て、一座の衆は、唯々驚くのみであつた。

二六 焼討と布教

草堂の焼討

天魔破旬の所業と罵られて、鎌倉の武士共は固より、諸宗の信徒僧侶は、日

つ怒り且つ憎み、密かに復讐の機到るを待つて居た。

時は八月二十七日の夜。執權長時に唆かされた極樂寺の大檀越陸奥守の家臣を首め、總勢數百人、各手に、刀劍炬火を振り翳しつゝ、松葉ヶ谷の草庵を取り圍み、ドツと閃を擧げて、轟然襲撃し來つた、其夜宿直の進士太郎善春は、唯ならぬ物音に、素破法敵の夜襲ぞと目をさまし、法弟を指揮して、群がる敵に打ち向かひ、無二無三に斬り捲くる中、早やくも松明を投げつけられ、行者の草庵は、忽ちにして、あはれ一炬の煙と化し去つた。

この夜日蓮は、法樂の爲め、法鼓を擲ち鳴らし、帝釋天のみまへに讀經して居たが、一疋の白猿椽の下より驅上つて、法衣の袖を掴みつゝ、何か知ら物言ひたげに、雑林の間を東へ東へと導くこと七八丁。とある岩窟の前に立ちて、ふと松葉ヶ谷の方を顧りみれば、草庵のあたり猛火たち上りて、燄天を焦して

居る。日蓮は、

「さては法敵押し寄せて、我草庵を焼討したであらう。さりながら、これも邪宗折伏の爲には、免がれ難い運命ぢや」

と、只管法弟の身の上を憂慮しつゝ、土窟の中に入りて、聲も朗かに讀經する中、夜はほのぼのと明けわたつた。と見れば、不思議や幾多の小猿は、恭しげに日蓮の前に跪きつゝ、柴栗、覆盆子、榎の實を、交る／＼供養するのであつた。

三日目の夕方、俄に人聲聞へて、數人の梵音が窟の外に止まると見るや、いかにも嬉し氣に、

「オ、師の御坊には、此處に在らせられましたか。先は御息災で、かやうな喜びはござりませぬ」

と、額づいたのは、間違もなき二人の法弟。日蓮は事の顛末を残らず聞いて、「寄手の中には、重傷を負ふて、終に落命したのもあると云ふのに、法弟隨身に至るまで、孰れも無難とは、これ法華經の御利益によるもの。さても不便の者共、これも全く邪宗の咎め、僧侶の罪ぢや。南無妙法蓮華經』と、限らない法力に感謝するのであつた。

下總若宮の布教

日蓮焼死の噂は、それからそれへと傳つた。下總國若宮の領主富木播磨守は、之を以て、必定虚説なりとし、腹心の家來宮地五郎に命じて、日蓮の所在を探らしめ、密かに四條進士と謀つて、一まづ下總へ迎へることとなつた。

胤繼は既に有髪の弟子となり、一族悉く受戒して、只管妙宗の爲に、力を

盡しつゝあつたから、日蓮の到着するや、胤繼は泣いて其息災を喜び、館の傍に、法華堂を營むで妙宗の教義を説くこと一百日、附近の士民、風を慕ふて歸依する者數知れず。白井の住人秋元太郎兵衛は、忽ち珠數を切つて改宗し、曾谷入道は、其化導によつて大法を證得し、中山の住人太田左衛門尉乘明は、妻と共に其化導に與かり、柏井の鐘阿彌は、一二論難を試みたにも拘はらず、即坐に説き伏せられて、忽ち妙宗に歸依し、晝夜眼を据え拳を握つて、題目を唱へ、其聲村中に響き渡つたので、首題坊日唱と命名し、其子も亦法弟となつて、日惠と名づけられた。

歸府と神道研鑽

かくて其秋の末、百座の説法がすむだ。之と前後して、鎌倉の草庵にては、

檀越の人々相議り、番匠左官を遣はし、既に新なる一堂宇を營み了つたから、日蓮は益奮ひ起ちて、邪宗を折伏せむとして信徒に別れを告げて、若宮を發し、日を経て、復た鎌倉の人となつた、

日蓮が捲土重來の勢を以て、諸宗の折伏に力むる論鋒は、益痛烈を極め、而も其透徹せる法理は、遠近の僧俗男女を動かして、妙宗に歸依する者、日に益多きを加ふるので、諸宗の凡僧俗輩は、口を極めて日蓮を罵り、さまざまの方法を企みて、日蓮を除くやう、北條家に讒訴するのであつた。

さはれ法難を豫期せる大聖日蓮は、聊かも恐るゝ色なく、此上さらに神道を研究せむとし、後事を日昭に托して、一日飄然伊勢に向つた。時に弘長元年日蓮四十歳の春。

途に大廟に詣で、間もなく洛東に入つた日蓮は、直に吉田神社の祠官吉田兼

益を訪づれ、禮を厚うして教を請ふたが、兼益は一たび相語るに及むで、その學徳非凡なるに驚き、三十二尊の神號を首め、奥義秘訣を擧げて、悉く之を傳授し、日ならずして全く其道を會得するに至つた。

二七 伊豆流罪

漁夫日蓮を庇ふ

神道の大意を會得して、鎌倉に立ち歸つた日蓮は、其後も辻説法を止めず。法鼓の響は、依然鎌倉の天地に鳴り響いた。されば其熱烈なる説法に感動して、宗門に歸依する者日に益多く、ことに鎌倉武士の教を請ふ者、著しく其の多きを加へたのは、世人の寧ろ意外とする所であつた。が、それと共に、密かに曠患の炎をもやしつゝある者も亦、決して尠くはなかつた。わけて良觀の如きは、

憤懣遺る所なく、乗すべき機會さへあらば、直に之を陥れむとし、執權長時と相通じて、唯々その時の到るを待つて居た。

時は文應二年五月十三日の朝、日蓮は例の如く、琵琶小路の街頭に立つて、「我を罵る者も、歸依する者も、法華教の功德によりて、悉く救はれむと、熱心に其教を傳へて居たが、何事ぞ幕吏は、突然番卒を差し向けて、日蓮を捉へ、何等の審問をも加ふることなく無法にも、之を流罪に處し、直に日蓮を由比が濱に引立てた。

この報傳るや、檀越法弟は事の意外なるに驚き、何れも其後を追ふて、涙ながらに、今一度師の坊に見えむことを願つたが、番丁は之を拒むで近けず、而も其中船は出でむとするので、再び之を請へば、許さざるのみか、動もすれば、棍棒を揮つて之を撃たむとする。此時日蓮は舷側に立ち出で、儼然として、

「汝等日頃の教を忘れたる乎、末法に法華教を支持する者は、刀杖誣言の難を受け、或は遠流の刑に處せらるゝこと、勸持品に説かれてある。今我れ何如なる迫害に遇ふとも、我法は日月と共に滅ぶることなく、益廣宣流布すること、決して疑ひない。今より後、我れは朝日の東に上るを見れば、汝等鎌倉に在るを思ひ、月西に入らば、汝等日蓮伊東に在るを思へ、設任今別るゝとも、必ず再會の機があるであらう。さらば」

と、言ひ放たれた。このことを聞いて法弟等は、聲を惜まず、沖を望むで、唯働哭するのみであつた。

船は愈岸を離れて、

『南無妙法蓮華經』

『南無妙法蓮華經』

題目を唱ふる聲、浪の音に和して、盡きの恨を、空しく由比ヶ濱邊に止むるのであつた。

船河奈の津に達すると、護送の幕吏は、岸邊を指さし、

「向ふに見ゆる森影は、伊東である。此處からそろ／＼參られい」

と、日蓮を粗岩と云ふ岩の上に追ひ上げて、直に船を鎌倉へ漕ぎ戻した。

「さては我を殺す爲、かゝる所に捨て置いたか、よしさらば、不惜身命の我れ日蓮。生死双つながら、神意佛慮に任せまつらむ。南無妙法蓮華經」

と、泰然として題目を唱へつゝ、白漣躍るが如き海の上を眺むる折りしも、漕ぎ寄せ來つた小舟の漁師は、日蓮を仰ぎ見て、いたく打ち驚き、

「や、御坊には、何でこんな所に居らつしやる。こは陸地を離れた浪間の巖満潮には、海の底にかくるゝ暗礁でござる」

と聞くより、日蓮はやをら身を起し、

『我は鎌倉の僧日蓮と申す者。今度伊豆の伊東に流罪の身となつて、唯今こゝまで到着した。南無妙法蓮華經』

と云つたので、漁師は直に船を漕ぎ寄せて、

『私は川奈の濱の彌三郎といふ漁師。今宵は母の十三回忌に當りまするから、殺生をやめて、只管佛事を營まうかと思ひましたれど、一日休めば其日の生活にも苦しむ身の上。本意ならずも、漁に出たのに、思ひがけない此會合。さて、御出家を助けたら、此上もない亡き母への追善。さ、早う此舟に乗らつしやりませ』

と。日蓮を我船に乗せて、篠見が浦なる己が伏屋の裏手に漕ぎついた。

紙燭を秉つて迎へ出た女房は、出家の姿を訝しんだが、仔細を聞かされて、

ふと紙燭を吹き消し、

『唯今村方の觸によると、流罪の出家が見えて、其法門に歸依する者も、かくまつた者も、重い咎を受くるとのこと、どうか其心して』

と、良人の口にさし寄せて私語けば、彌三郎も、それと合點し、日蓮を我家の納戸に導き、筵簾を下して、窃に心ばかりの晩食を供し、其後は人にかくれ、世を憚つて、之を後庭の岩窟にかくまい。食事萬端氣を摧きつゝ、流罪の人を庇護して呉れるので、日蓮は涙を湛えながら、其恩を謝し、彌三郎夫婦も亦、日夕端嚴優麗にして、慈悲の心溢るゝが如き上人の振舞を見、かつ其法説を聞くにつけて、渴仰の念やみ難く、忽ち其宗旨を捨て、日蓮の教に歸伏した。日蓮が其後彌三郎夫婦に送られた手紙の中に、

『地頭萬民日蓮を惡みねたむこと、鎌倉よりも過ぎたり。見る者は目をひき、

聞く者は怨む。ことに五月のことなれば、米も乏しからむに、日蓮を内々にてはぐくみ給ひしこと、日蓮が父母の、伊豆伊東川奈といふ所に生れかはり給ふか云々』

と云ふ一節がある。以て日蓮の感謝が、如何に深かかりしかを察するに足るであらう。

伊東領主の歸伏

日蓮伊東に在ること三十日。一日不圖、伊東の領主伊東八郎左衛門朝高の一族、綾部正清なるもの日蓮を訪ねて來た。そは此年五月の中期から、流行の悪疾に罹つて、日に日に重態に陥りつゝある領主の爲に、百方手を盡くしても、何等の驗がないので、法華經の功德を以て、その生命を救はむことを請ふた。

日蓮は領主の病が、全く謗法の罪なるを説き諭し、六月十三日彌三郎夫妻に別を告げて、伊東に向つた。

程なく領主の邸に導かれ、その容態を見れば、氣息奄々、實に此世の者ごも思はれぬ程であつたが、上人は熱誠をこめて祈ること三日。さしもの重態も、次第に回春の兆を示し、數日の後には、早や常態に復したので、朝高一家の喜びと崇拜とは言ふまでもなく、傳へ聞く者何れも其法力に驚き、自ら進むで歸依する者暫しは其跡を絶たなかつた。

ある日日蓮は、問はるゝまゝ、その奉仕するは、釋尊の一佛にして、我が信するは、法華經の一つなるを述べ、さらに諄々として、妙宗の本義を説き示した所、朝高は『さらば上人に奉るべきものがござる』とて、

『不思議なことには、先年當所松原の海中に夜な夜な光明を見るので、曳網

で曳き上げると、一體の佛像。それを阿彌陀如來と見違へて、頻りに念佛申した所。其頃から村には疫病切りに流行し、數多死人を出す中、誰いふことなく、かの像を、阿彌陀如來さまでなく、釋迦如來だとの評判が一村に傳つた。よくよく見ると、果してそれに相違ないので、村民は何れも驚き呆れ、惡疫流行も、必定この佛の所爲であらうと、拙者方に持ち込まれ、薄氣味悪くは思ひながら、地頭の役柄とて、謝はることもならず、一應預かり置きました。何卒ご一覽を」

て、箱より取出すのを、法衣の袂に受けて、恭しく打見れば、紛ふ方なき釋迦如來。

「末法第五の時に及むで、苦しみの海より浮き出で、光明を放つて出現すところあるは、必定法華經弘通の證」

と、幾たびも押し戴いて、暫時自我偈の文を唱へつゝ、坐る感涙に咽めば、朝高も亦隨喜の涙をこぼして、之を禮拜するのであつた。

配所の日蓮上人

日蓮は流罪の身ながら、天をも怨みず、人をも咎めず、これより後は和田山麓の庵に在つて、只管法華經に親しみつゝ、日夕讀經三昧に入るのであつた。固より法敵四邊に在るも、領主朝高が歸依した以來、士民の隨喜渴仰する者數知れず、従つて其待遇供養など、とても配所とは思へぬ程であつた。

その中先年和泉で結縁した江川吉久も訪ね來り、鎌倉の日朗日興など亦折々忍び來りて、その安否を問ふので、日蓮は心のどかに月日を送つて居たが、北條陸奥守重時は、日蓮を伊豆に流してより俄に發狂し、十一月の下浣竟に極樂

寺に没し、執權長時も夜な夜な悪夢に魘されて、精神半ば錯亂し、その起居さへ不自由の身となりしが、北條時頼、其子時宗も亦、凶夢に襲はるゝこと數次なので、衆僧に祈禱を命じ、父祖の菩提を弔ふなど、百方手を盡したが、更に其驗も見えなかつた。仍で時頼は不圖、「これ罪なき日蓮を流した報ひではあるまい乎」と思ひつき、よくくその言ふ所を思ひ見れば、言過激に失するの嫌ひあるも、亦有徳の一沙門。ことに立正安國に説き示せることが、殆ど事實と符合するので、早く赦免するに如かずと做し、直に赦免状を認めて、之を伊東の日蓮に送つた。時に弘長三年五月二十二日。

そこで日蓮は、伊東の信徒檀越に別れを告げて、復び鎌倉に立ち歸つたが、法弟信徒の喜びは、譬ふるに物なく、日昭は過去三年に亘る布教の概略を叙し、日朗は、流罪中に、大乘坊と云ふ一人の弟子を得たることを語つて、之を紹介し、積る物語に、日のはや傾けるのを忘れた程あつた。

二八 信念益々固し

當時日蓮の高徳と、法弟の努力とによりて、法威は益關東に輝き渡たので、今後の方針につき、法弟等は何れも、「この上は他宗折伏の危道をとらむより、寧ろ徐ろに正法教化の方法を取る方がよろしからむ」と申し述べたが、日蓮は儼然として、

「今は末法第五の時。中道にして折伏を止むるは、斷じて慈悲にはござらぬ。此上權門を折伏すれば、三類の法敵愈四邊にせまり、流竄は愚か、或は刃の我首に落ち來ることあらう。さりながら其時こそ妙宗の御利益は益顯はれるでござらう。再びかゝること申されては、日蓮の志奮はれますまい

ぞ』

と、説き諭したので、何れも今さらながら、師の勇氣と決心とにうたれ、この語に感奮興起せざるものは、一人も無つた。

しかるに此年秋の初から、暴風雨の災頻りに起つて、山岳崩れ、人家は倒れ、田畑は流れ八月二十四日には、海嘯の爲人畜の死傷數知れず。十二月二十日には、最明寺入道時頼病没し、明くる文永元年七月五日には、大慧星現はれ、八月には執權長時逝いて時宗之に代り、人心恟々として、何れも其堵に安する者はなかつた。

二九 死せる母を蘇生らす

秋風林を渡つて、郷思切りに動く頃となつた。而かも些か暇を得たので、父

の墓参かたぐ、母の安否を問ふ爲、日朗日澄を召し連れて、故里の小湊に立ち歸つた。

然るに何事ぞ。我家の門邊に着いて、鬨を跨げば、何やら人々の立ち騒ぐ氣色、こは唯事ならじと、座に上れば、あはれ母は、懐かしき我母は、今し粹切れしとて、水よ薬よとて打ち騒ぐ所であつた。それと見るより、日蓮は痛く打ち驚いて、そのまゝ母の臥床に轉び入り、

『母上。母上。日蓮が参りました』

と、母の遺骸に取り絶つて、呼べと叫べど、固より何の應へもない。日蓮は、悔恨の涙はらくと落つるを、法衣の袂に拂ひつゝ、本尊を書いて床にかけ、禮拜しつゝ一心不亂に蘇生の祈願を凝せば、母は忽ち蘇生つて、南無妙法蓮華經と唱へたので、並び居る一座は、其功德に驚き、何れも齊しく之に和した。

死せる母を蘇生らす

日蓮は晝夜少しも其側を離れず、いと懇ろに看護したので、其病は次第に癒え、法華經の功德によりて、母の死を回したと云ふ噂は、忽ち村から村、人から人へ傳つた。

かくて悪疫はらひの祈禱を行ひ、程なく疫癘を攘ひ得たので、房總の住民は、悉く日蓮に歸依し、男金村の小林民部實信の如きは、一子藤十郎を其法弟とするに至り、かつて日蓮を迫害した華房の蓮華寺すら、その法威に靡かぬ者は一人もなかつた。

ある日清澄寺の道善法印は、淨顯淨義に扶けられて、華房なる日蓮を訪づれ、涙を流して久瀾を叙し、かつ其深遠なる法間教化に、いたく感動し、天津の領主工藤左近之丞吉隆は、使者を立て、法話を請ふなど、郷里の日蓮は、殆ど寧日なき有様であつた。このこと早くも、舊怨の人東條左衛門景信の知る所

となり、總勢百餘人を糾合し、武装を整へて、愈々松原に襲撃することとなつた。一難去つて一難復た來る。かくして日蓮の頭上には、又將に一大危難が落ち來らむとして居つた。

時は十一月十一日。日蓮は、工藤吉隆に招待せられて、蓮華寺を立ち出で、之より天津に向はむと法鼓を鳴らし、題目を唱へつゝ、小松原に差し蒐れば、何者の狼藉ぞ。忽然として吶喊の聲木蔭に起るよと見るく、總勢數百の武士共前に立ち現はれ、『惡僧覺悟しろ』とばかりに、鎌を揃えて矢を放つた。日蓮は吃と彼方を凝視つゝ、

『何者なれば、かゝる狼籍召さるゝ乎』

と言ひ放つや、敵は早くも太刀をスラリと抜き翳し、日蓮めがけて突進し來るを、それと見て、隨從し來つた日朗、日澄、鏡忍、乘觀等十餘人。群がる敵

死せる母を蘇生らす

を物ともせず、縦横無盡に闘ふ中、衆寡敵せず、鏡忍まづ斃れ、乗觀は重傷を負ひ、その他の面々亦各身に數個所の手傷を受けて、死物狂ひに戦つた。

この日工藤吉隆は、日蓮到着の時刻が餘りに遅るゝので、出迎ひの爲家を出たが、途に矢叫びの音を聞き、何事ならむと驅けつけ見れば、この有様なので、直に太刀引き抜いて、無二無三に斬り捲つたが、哀れ衆寡敵せず、吉隆も亦その場に戦死した。

是に於て景信は、驀然駒を進め、「多年の遺恨思ひ知れ」と、日蓮の眞向見かけて、斬り下す太刀さき鋭く、眞二つと思ひきや、

『南無妙法蓮華經。序品第一』

と、九字をきつた一刹那。押もむ念珠の母珠を割つて、餘勢僅に額を傷つた。

景信は再び振りかざし、勢込むで打ち下せば、こは何事ぞ！。太刀は柄元よりボキッと折れた。餘りの不思議さに、道がの景信もハッと驚ろき、唯々目を瞳つて、茫乎して居る間に、日蓮の姿は何處ともなく、忽ち掻き消されて了つた。

その翌朝吉隆の父工藤行光は、天津の館に日蓮を迎へ、吉隆の爲に特に經を誦し、野邊の送りを營むだが、日蓮は深く其死を悼み、はふり落つる涙の雨に法衣の袂を沾ほしつゝ、法號を妙隆院日玉上人と稱け、出家の儀式をととのへて、厚く之を葬つた。

其頃吉隆の妻は、懷妊して臨月に近いて居たので、行光は生れし子若し男子ならば、吉隆が遺志を繼いで、必ず法弟の一人に加へられたしとの希望を申入れたが、日蓮は快く之を諾し、約を履むで後年之を化導し、刑部阿闍利日隆と

して、其名一代に顯はるゝの名僧となした。

三〇 兩總巡錫

東條景信は、日蓮を打洩して、悔恨の情に勝えず。さらに新しき手を出して、之を追撃せむと思つたが、創口俄に化膿して、痛み甚しく、竟に總身腐爛して、其翌日狂ひ死に死むで了まつた。

景信の狂死は、必定正法敵對の佛罰であらうと傳へられ、念佛の珠數おし切つて、改宗する者、いよゝ多きを加へた。

是に於て日蓮は、遭難の地に、吉隆及び鏡忍坊の菩提を弔ひ、文永二年の春、房州を去つて、下總の地を巡錫することとなつた。

かくて到る處に、法筵を開いて、邪宗の折伏に力めたので、歸依する者益々

多く、其法弟となつた者には、日正、妙正、日保を首め、俗人武士の歸依する者、數ふるに違ない程であつた。

三一 母妙蓮遂に逝く

日蓮は一日母の死を回へしたが、尙ほ懸念せらるゝまゝ、遠く出でず。程近き房總の地に巡錫して居たが、鎌倉の消息は、手に取るが如く幾たびも傳はつた。

日蝕——暴風雨——地震——慧星などの天變地異は、尙息まず。宗尊親王は此變災に心を苦しめ、わけて北條氏の專横を憤り、私かに僧に命じて、之を呪はしめ給ふたこと發覺し、竟に京都に送り還され、三歳の惟康親王之に代つて將軍となられた。

如此く天象人事民の心を動かし、鎌倉の天地は、寔に寧所なき有様であつたが、日蓮はそれでも、決して歸らうとはしなかつた。偶母の再び病臥せるを聞き、大に驚き、直に小湊に歸つて、日夜看護に手を盡したが、文永四年八月十五日、眠るが如く此世を去つた。

日蓮は天に慟し、地に哭し、涙ながらに野邊の送りをすませ、墓畔に庵を結むで、看經供養すること、前後一百日。訖つて故郷を立ち出で、再び上總の各地に法筵を開き、次で下總若宮の富木邸に足を停め、其義子に大戒を授けて法弟となし、文永五年の春。四年振りに復た松葉ヶ谷の草庵に入つた。

三三 蒙古の牒狀來る

日蓮が立正安國論を以て、天下に宣明した如く、他國の侵逼難は、ここに愈

その朕兆をあらはして來た。

時は文永五年閏正月十八日。蒙古王忽必烈の臣黑的は、朝鮮國王の臣潘阜を嚮導として、我國に來り、各その國書を我朝廷に上つた。その國書に曰く。

『大蒙古皇帝、書を日本國王に奉ず。朕惟ふに、古より小國の君は、境土相接するだに、尙ほ務めて信を講じ、睦を修す。況んや我が祖宗、天の明命を受けて、掩いに區夏を有ち、遐方異域威を畏れ、德に懐くもの、悉く數ふ可からざるをや。朕即位の初、高麗無辜の民、久しく鋒鏑に瘁かるゝを以て、即ち令して兵を罷めしめ、其疆域を還へし、其旄旄を反へす。高麗の君臣、感戴して來朝す。義は君臣と雖も、歡は父子の若し、計るに王の君臣亦た己に之れを知らん。高麗は朕の東藩なり。日本は高麗に密通し、開國以來亦た時に中國に通ず。朕の躬に至りて、一乘の使ひ、以て和好を通ずることなし。』

尙ほ恐らくは、王國之れを知ること、未だ審らかならざらんことを。故に特
に使を遣はし、書を持して、朕の志を布告せしむ。翼はくば今より以往、
問を通じ、好みを結んで、以て相親睦せんことを。且つ聖人は、四海を以て
家と爲す。相通好せざること、豈に一家の理ならんや。以て兵を用ふるに至
ると。夫れ孰れが好む所ぞ。王其れ之れを圖れ』

正にこれ笑中劍を藏するの文字で、名を通好に籍つて、我日本を犯さむとする
もの。時の執權北條時宗は、朝廷より其書を下さるゝに及むで、大に其無禮を
憤り、返書すら與へず、直に之を放追した、

蒙古牒狀の報は、紫電の如く國中に傳はり、今にも元の大軍、海を渡つて我
國を襲ふかと、人心恟々、唯々世の成行を憂ふる中、五月八日に至つて、日輪
二つ天に現はれ、厄災頻りに鎌倉の天地に起つた。日蓮は、

『天に二日なしとは古來の言。今ごろかゝる天象を見るのは、必定國家謗法
の罰であらう。しかるに上下之を悟らぬは、國家の不幸この上もなし。縦し
我は如何なる罪科を蒙らう共、不忠の人となるに忍びぬ。いざさらば、我が
志を述べむ。』

とて、一書を裁し、八月二十一日を以て、社寺職宿屋光則の下に此の書を送つ
た。

『日蓮さきに一篇の書を上りてより越に九年。今や蒙古牒狀を送り來ると承
はる。若し經文の如くむば、蒙古我國を攻めむこと必定に候。日本國中西戎
を調伏すべきもの、唯日蓮一人にのみこそ候へ。君の爲、國の爲、神の爲、
佛の爲、内奏を経らるべき乎。委細は見參を遂げて、悉くし候はむ』
と。されど光則からは、之に對して、何等の返詞もなかつた。

仍で十一月十一日を以て、日蓮は一書を北條時宗に呈し、

「國家の安危は、政治の曲直により、佛法の正邪は、經文の權實に存すること、立正安國論にも述べたる如くなるが、所詮は、諸宗の名僧智識を問注所へ召出され、日蓮と對決せしめ、彼此の正邪曲直を闡明し、邪宗を排して、純圓一實の正法に歸依せられなば、國家の安泰、期して待つべきであらう。この宗論は、敢へて日蓮が私曲にあらず。神の爲、君の爲、國の爲、將又一切衆生の爲に言上す」

との意を明かに告白し、一書を添へて、光則の許に送り、同時に平頼綱、北條彌源太、建長寺道隆、極樂寺良觀、大佛殿別當、壽福寺、淨光明寺、多寶寺、長樂寺へもそれ／＼書状を送つた。

日蓮は更に檀徒の人々に對しても、「今度蒙古の牒狀到來せしにつき、速かに

邪宗を折伏すべく、諸方に書状を發し、愈正邪曲直の問題對決を申込むだ以上、諸宗の怨嫉は固より、鎌倉殿の憤は、愈甚しきものあらむ。従つて一門の徒は、定めて流罪死罪に處せらるゝであらうが、少しも驚くには足らぬ。妻子眷屬うち忘れ、生死の絆を斷つて、宗門の爲に佛果を遂げられよ」と、説き諭した。

この時、偶東陲の蝦夷叛して、所在に蜂起したので、日蓮は蒙古の襲來愈近づきたるを看取し、佛識の的確なるを感じつゝ、日夜國家の前途を憂慮して止まなかつた。

三三三 諸宗の讒訴

日蓮に戦ひを挑まれた諸宗の高僧智識達は、日蓮と對決してとても、之を説

き伏するの望がないので、密かに暗中飛躍を試み、或は「元と通じて、我國を滅ぼさん」とか、或は「近年の凶變は、悉く日蓮の呪咀する所」とか、種種の讒を構へて、之を鎌倉殿に訴へ出でたが、時宗は別に觀る所あつてか、敢て之を取り上げなかつた。

かゝる間に、其年も暮れて、いよいよ文永六年の春を迎へたが、四月に入ると間もなく、元の使者再び對馬に來り、さらに東上せむとしたるも、島主宗資に遮ぎられて之を果さず、空しく蒙古に引き返したが、使節は其時密かに、對馬の住人塔二郎、及彌三郎なる者二名を拉して、之を本國に連れ歸つたとの報鎌倉に達した。

日蓮は此報を聞き、侵逼難の益近けるを知り、甲州巡錫のついで富士登山を試み、豫ねて寫し置いた一部の法華經を山頂に埋め、尙ほ末法萬年法華教

弘通の基を堅める爲、巖上に坐して、暫らく何事か祈念し、山を下るや、甲州一圓を巡錫して、各地に法筵を開き、懇ろに妙宗の本義を教へたので、士民の歸依する者、日に益多く、或村の如きは、全村擧つて其信徒となつた位である。かくて巡錫を了り、程なく鎌倉に歸つたが、諸宗の俗僧は、其訴が取り上げられぬので、益業をにやし、隙あらば之に乗せむとて、何れも齊しく環視の目を瞪つて居た。

三四 日蓮の法力(或は疫癘を攘ひ或は雨を降す)

文永七年の春から、夏にかけて、房總の地は、疫癘猖獗を極め、住民の死者算をみだし、光景轉た慘憺たるものがあつた。日蓮は檀越の人々から、惡疫鎮めの祈禱を修するやう訪はれたが、時恰かも法敵四圍に迫るの折柄とて、

猥りに他出を許されなかつたから、佛具師に命じて、我肖像を刻せしめ、白布に南無妙法蓮華經の七字を書して、木像にかけ、其地に送つて、津々浦々の海上を曳き廻らしめたるに、疫病はハタと熄むだ。

然るに此年二月の末頃から、晴天うちつゞきて、六月に入れば、河水は涸れ、大地は早魃して、草木色を失し、插秧は固より一切の農作は、それが爲に中止の止むなきに至つた。

執權北條時宗は、深く之を憂ひ、極樂寺の良觀法師に、雨乞ひの祈禱を命じたのであつた。良觀は法敵日蓮を壓するは、此時に在りとし、私に會心の笑みを漏し、即時に之を引き受けたが、日蓮も亦之を聞いて、「これ法力を戦はすべき屈強の時機なり」と信じ、只管時の到るを待つて居た。

いよく七月十七日になると、良觀は威容嚴かに儀式を整へ、ここに改めて

雨乞ひの法を修することとなつた。

振鈴の響、讀經の聲。玉なす汗は額に流れ、只管丹誠を凝らす修法の尊さに、人々何れも敬意を拂つた。しかるに二日三日を経つても、七日に至つても、何等の驗もないので、良觀は更に一七日を乞ひ、衆僧悉く額に汗し、聲を嗄らして讀經を行へども、あはれ大風の、濛々たる沙塵を捲き上ぐるのみで、雨は一滴も降らなかつた。

日蓮は、伊豫の破戒僧能因法師が、

天の川苗代水をせき下せ

天降ります神ならば神

の歌を詠じ、又和泉式部が、

理や日の本なれば照るぞかし、

ふらざらめやは天が下には。

この歌を詠むで、雨を降らしたこともあるに、二七日の祈禱を以てして、尙且つ一滴の雨だに降らす能はざる者、争で一期の大事たる往生成佛を遂げしめることが出来やうぞ。良觀上人若し誠の出家ならば、速かに心の邪慢を除き、怨嫉の念を去つて、降雨の法、成佛の道を我れに學ばるゝが可らうと責め立てた。

しかし良觀の修法は、今や全く失敗に歸したので、さらば日蓮、今より末法應時の法力を示すでござらうと、七里ヶ濱に近き田鍋が池に抵り、香を焚き花を供へ、經文を認めて淵に投じ、徐かに經文を誦する折柄、一天忽ち黒雲に掩はれ、疾風雷電遽然として起り、三日三夜、大雨止みなく降りつゞき、山も、川も、人も、草も、木も、皆立地ろに蘇生つた。

法力の比較によつて、見事日蓮に敗られた良觀法師は固より、之によりて鼎の輕重を問はれた各宗の僧俗は、憤懣措く能はず。如何にもして之を排擠せんとし、陰に陽に之が籌策を回らしつゝあつた。

三五 問注所の糺問

日蓮は之を知るも、泰然として敢て動かなかつた。時は八月三日。時宗は日蓮を召して詰問し、若し宗法の邪義を含むものどせば、直に之を罪科に處せむと、愈々日蓮を問注所に呼び出すこととなつた。

日蓮は悠然列坐の前に進み、頼綱の糺問に對して、聊か動する氣色もなく、從容として、まづ法敵の訴狀を默讀するに、「日蓮は邪見の僧にして、法華教以外の大乗を蔑如し、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と公言して憚らず。

飽くまで他宗を譏謗して、衆生を惑はすは、言語同斷、殊に去る日請雨の際、鎌倉の諸刹を焼き拂つて、僧侶の首を斬り、由比濱に梟したなら、雨立ろに到るべしなど、暴言その極に達する者。國家衆生の爲、速に日蓮を排擠するやう」との意味であつた。日蓮は、さらに臆する氣色もなく、直に筆を執つて、答書を書いた。

答書

日蓮の一を是として、諸を非とすること、理豈に然るべけんやとは、訴牒の申すところ。

道禪禪師は、當今末法は是れ五濁惡世なり、唯淨土の一門のみありて、路に通入すべしと言ひ、善導和尙は、千中無一と言ひ、法然上人は、捨閉闍拋と言ふ。これ一を是として、諸を非とするものにあらずや。然るに然阿上人等、

日蓮の一を是とし、諸を非とするを謗法なりと言ふ。其の本師三人の義に相違せずや。良觀上人は、彼等の立義に與力して、此れを正義と存せらるゝ歟。

日蓮法華の一部に偏して、諸餘の大乗を誹謗すとは、又訴牒に言ふところ。無量義經には四十餘年。未だ眞實を顯はさずとあり。法華經の一部を讚嘆するは、實に釋尊の金言なり。諸佛の傍例なり。敢て日蓮の自義にあらず、況んや此事たる、南都の徳一大師これを難じて、傳教大師の爲に論破せられたるをや。

法華經前に説ける諸經は、皆妄語なりとは、此れ又日蓮の私言にあらず。無量義經に言ふ所の未顯眞實とは、即ち是れ妄語の義なるのみ。日蓮是の故に、四十餘年の經々を妄語と稱す。究竟釋尊の經義に外ならざるなり』

三六 満坐色を失す

日蓮はさらに、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊といへる所以を説き示し、次で邪宗折伏は、妙法弘通の定法なるを誨へ、尙ほ良觀、然阿などの妄語に、何等の根據なき所以を痛論して、その答書を差出した。

頼綱は重ねて、

『其方極樂寺最明寺殿を地獄に墮し給ふたと申せし由。いよくそれに相違ない乎』

と詰問せられ、日蓮は從容として、

『其儀は今さら始まつたことではござらぬ。凡そ世界を照す日月でも、法華經の御敵とならば、惡道をのがれ申さぬ。されば人間世界の國王權臣何人ど

雖も、妙法を度外視し、蔑如して、何處で助かる道がござらう』

『そも〜我が言ふ所は、悉く釋尊の金言なれば、日蓮を罪し給はば、内亂起り、外患臻つて、國家は滅亡するに違いない。よく〜御思慮をめぐらせられい』

と言ひ放てば、満坐の人々愕然として、互に顔を見合はすのみであつた。

日蓮退出後の大評定は、議論紛々として、容易に決する所がなかつた。越へて十二日、日蓮は自から頼綱を訪づれ、立正安國論を提出して、意見の一端を述べたが、頼綱は、『治國の政治に佛法の助言を要せぬ』と、怫然袂を拂つて立ち去つた。仍で日蓮は、國家の前途を危ぶみつゝ、悄然松葉谷の草堂に歸つた。

三七 龍口の法難

時は文永八年九月十二日申の刻。頼綱の邸から歸つて、例の如く説法を試み居つた折柄、砂塵をあげて押寄せた小具足の總勢數百人、直に草庵を取り圍むので、日蓮は直にそれツと觀念の臍を固め、逸早く釋尊の立像と、法華教一巻を懐に入れ、「方々には怪我なされぬやう」と、慌て惶めく會衆を抵鎮めつ徐に坐を立つた。この時馬上の頼綱は聲あららげ、

『上を蔑如し、下を惑はし、佛法弘通に名を籍つて、國家を亂す大罪人。疾く疾く搦め取つて成敗せよとの御嚴命。イザ尋常に繩にかかれ』
と呼ばれば、日蓮は莞爾打笑み、

「法の爲に捧げた此身。何の命が惜しからう。サ、如何やうにも處置せられ

い。決して苦しうはござらぬ』

自若として答ふるを、

『それ搦め捕れ』

と、伊和瀬大輔、齊藤三郎、躍り進みさま、襟を掴むで地上に引摺り下した。

日蓮は屹と言葉を改め、

『日蓮は如來の御使。法華經の行者であつて、我妙法は一切衆生を救濟し、國家の支柱となつて、天下の治平を保つのおや。然るに今この日蓮を罪せば禍 蕭牆の裡に起つて、他國の侵逼難立るに到らむ。汝は天下の奉行として、この眼前の一大危機を御存じなさらぬ乎』

と、告ぐる言葉の凜乎たるに、少輔坊は怫然として、『要らざる諫言吐かし居るか。』と、唐突懷中の法華經を引き出しさま、

「おのれ今更この經に未練を殘せる乎」
と、いと憎ましげに罵りつゝ、劇甚經文を揮つて、三たび其面を撲つた。

泣く者。笑ふ者。

血氣に逸る番卒は、さらに經文佛具を地に抛つて、甚しき侮辱を加へ、驢て頼綱の下知により、物をも言はせず搦め取つて、一まづ北條朝直の邸に赴き、それより諸方を引き廻し、龍の口の刑場に送らむとするのであるが、その取扱ひの慘酷なりしこと、到底目もあてられぬ程であつた。

沿道に群がる群集の中には、諸宗謗法の佛罰だと喜ぶ邪宗の信徒もあれば、また其冤罪を痛ましく思ふ、檀越の人々も少からず交つて居て、笑ひ、泣き、喜び、歎ける雲の如き群集は、警固の武士が、如何に制しても、後から後へと

押し寄するのであつた。

八幡大菩薩に物申す

かくて日蓮は、赤橋の畔に到つた。八幡大菩薩に物申さむとて、馬より飛び下りさま、シロリと群集を見渡して、鶴ヶ岡八幡宮の社殿を遙に望見し、

「日蓮は日本第一の法華經の行者。衆生の謗法を憫み、本化妙宗の法文を開いて、世の爲、國の爲、一切衆生を濟度せむとの志は、神明の固より知ろし召さるゝ所。想ふに、八幡大菩薩には、嘗つて和氣清鷹が、一大危機に立つた時、一丈の月となつて顯はれ、又傳教大師に紫の御袈裟を賜ひながら、今この日蓮を護らせ給はぬとは、何事ぞ。わけて蒙古侵迫せば、神明も亦安からぬと存せらるゝ、まして佛祖釋迦世尊の、法華經を弘通せらるゝ折、無

量の諸天、三國の善神、擧つて法華經の行者を守護する旨誓はせ給ふた。若し其誓ひに背かせ給ふならば、今宵日蓮が首利ねらるゝを待つて、靈山淨土に訴へ参らすでござらう。さなくば、疾く疾く神明庇護の現證を顯はし給はれ、何如に入幡大菩薩』

と、聲高らかに諫奏したので、中には、『何といふ不敬の言であらう。』とて本氣の沙汰ではござらぬ』などと、嘲り笑ひ、驚き歎く人々も少くはなかつた。

別れを金吾に告ぐ

かくて再び馬にうち跨れば、復もや町々里々を引き洵しながら、程なく御陵の社の前に差し蒐ると、日蓮は跟随け來れる忠僕熊王に聲かけ、

『この社の北なる四條左衛門の邸に参つて、我が最後のことを知らせて呉れ

い。』

と聞くより、熊王は息せききつて、かくと頼基に告げたので、

『素破一大事！』

と、兄弟三人直に駆けつけて、日蓮の姿を見るより、昏倒せむばかりに打ち驚いた。日蓮はいと懐しげに、

『オ、四條殿でござる乎。日蓮は之より首を斬られに参る所。これが定めて最後の對面でござらう。そもく雉と生れては、鷹に掴かまれ、鼠と生れては、猫に噉はるゝは娑婆の習、さりながら、日蓮は生れて親の爲、國の爲に未だ酬る盡されず。唯これのみが、不本意でござれど、幸に法華經の御爲に、一命を捧げ奉り、妙宗の功德を父母に致し、剩へ法弟檀越に分つを得ば、これ日蓮が本懐でござる。』

と、如何にも思ひ残す所なきものの如く、固き覺語の程を語れば、金吾頼基も、はふり落つる涙の雨を衣の袖に拂ひつゝ、法の爲には自から腹を屠つて、其師に殉せむと、

『さらば我等兄弟三人も、何とて後れまつりませう。何卒何處までも隨従を許して被下れませう』

と聞いて日蓮は莞爾と打ち笑む折柄、馳せつけた妙宗の信徒二百餘名。前後を塞いで邪魔するを、警護の士は、聲を嗔して押し退けつゝ、只管道を急ぐのであつた。

特信の萩の餅

日蓮は、不圖、七佛傳來の此袈裟を血に汚すは勿體ないと思ひ、自から脱し

て押戴き、とある松樹の枝にうちかけて、程なく腰越の里に達すれば、折しも息せき切つて駆けつけた一人の考婆があつた。

老婆は、日蓮が召捕られ、龍の口に送らるゝ由を傳へ聞き、せめて老後の思出に、何がなと思つたが、貧しき身の如何ともし難く、時を急いで、漸く胡麻の萩の餅を作つて持参したのであつた。

日蓮は涙ながらに志の程を語つて、捧げ出でた萩の餅を手にとつて、

『さて〜奇特な老媪の志。有難くお受けいたすでござらう』

と、供養回法師と回向しながら、護衛の武士にせき立てられ、月影悲しき七里ヶ濱を龍の口へと急ぐのであつた。

三八 怪光一閃

懐槍たる刑場の光景

龍口明神の祠前。海岸に近き所。嚴かに矢來を繞らし、さらに幔幕を張り廻して、炬火の光物凄く四邊を照し、絃月の影、蒼茫たる海の色、人をして、坐る鬼氣のせまるを覺えしむる。

警護の士に送られて、此處まで来た大聖日蓮は、直に馬より引きおろされて、刑場に曳かれた。四條兄弟は「最早最後の——」と云ひも果さず、潜然として涙のはふり落つるを禁じ得なかつた。

日蓮は、ほく笑みつゝ、

『法華經の爲に、一命捨つるは、此上もなき悦び、只々お笑ひ被下されう』と言ひ放ちつゝ、武士の指圖に従ひ、靜かに敷皮の上に坐るのであつた。

遙かに隔て、馬を控へ居るは、執事平左衛門尉頼綱。周圍には刺又鋒を携へた雑兵によりて護衛せられ、矢來の外には、法弟日昭、日朝、日興、日向を首め、檀越四條頼基、池上宗伸、荏原義宗その他の信徒數百名、何れも暗涙を呑むで各口には題目を唱へて居る。

削手の役は、依智三郎左衛門直重。刃を抜き放つて、ジツと日蓮を凝視めて居たが、つと日蓮の耳に口をよせ、涙ながらに、

『如何に御坊。御身は、新宗を弘布せむが爲、他宗誹謗の罪を犯かされ、今は早や御痛はしい御身の上、直重如何に嚴命とは云へ、佛法弘通の御身を斬り奉るは、如何にも罪深きことに存じます。されば御坊には、今よりきつと御心を改め、他宗の誹謗を止めさせ給へ。さすれば直重命に代へても、御坊を救ひ參らするで御座らう。如何に如何に』

と誨すを聴くより、日蓮は痛く直重の好意に感激し、

「如何にも辱けない。御好意の程、深く心に肝銘いたしますれど、法華經の爲に一命を抛つは、日蓮が本懐。この身は如何に成り行くとも決して法華經を捨つることは出来申さぬ。イザ／＼疾く首を刎ねられい。」

、徐かに合掌して、

「南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。」

題目の聲闇に消ゆるや、ヤツと一聲。振り上げた劔の光キラリと虚空に輝いた。

怪風怪光日蓮を救ふ

この時！。その刹那！。一陣の怪風轟然大地を捲いて、雷電霹靂忽ち到り、

柵を倒し、幕を裂き、炬火一時に滅すと見る間に、東南の天より、大さ満月の如き一つの怪光、飛箭の如く飛び來つた。と見れば、今しも振り上げた名劔蛇胴丸は、三斷して、削手直重は挫と其場に昏倒し、執事頼綱を首め、衆卒は、悉く數町かの彼方に逃げ去つて居た。

日蓮は、泰然として動かさず、「疾く疾く刎れ」と、二聲三聲呼はつたが、近よる者は一人もなく。聽て夜もほの／＼と明け渡り、陸地は一帶に荒れて、刑場の形もなかつた。

是に於て頼綱の使者は、直に狀を具して、時宗の指揮を仰ぐべく、鎌倉へ走せ向ふ途中、圖らずも、日蓮の赦狀を携へ來れる時宗の使者南條七郎なるものに會ひ、直に之を受取つて、龍の口に馳せ歸つた。赦狀には、

「沙門日蓮儀、一まづ當國依智郷の住人本間六郎左衛門重連へ引渡し候へ」